
バカとテストと召喚獣と・・・、

下之宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣と・・・、

【NZコード】

N4244X

【作者名】

下之宮 海

【あらすじ】

自分の名前しか記憶がない青年、天野快は文月学園に転校することになっていた。床に落ちていた謎の物体を拾つた直後に灰色のオーロラが降りてきて・・・。「行くぜ・・・サモン！変身！」人気ライトノベル「バカとテストと召喚獣」と「仮面ライダーディケイド」のクロスオーバー作品です！（時々ガンダムも・・・）

一人の青年「天野快」（てんのかい）、彼は一切の記憶がない。辛うじて自分の名前を憶えている程度である。気が付けば自分の家と思われるどこにでもありそうな一階建ての家のリビングで倒れていた。自分のことを少しでも思い出そうとしている。テーブルの上に鞄を見つけた。そのなかには「文月学園生徒手帳」と転入届、そして教科書一式が入っていた。さらにその生徒手帳の間に謎の「2 F」と書かれた紙が四つ折りにされて挟まっていた。どうやらこの鞄は文月学園の指定鞄のようだ。

「どうやら俺は、文月学園とやらに転校することになっている。」と理解した快はとりあえず、外に出てみようと玄関に向かった。リビングから出るために扉に手をかけたその時、ガタン！…という大きな音が響き渡った。「！？」驚いて振り向くと、床の上に妙に埃をかぶったベルトのようなものが転がっていた。快は吸い寄せられるようにそれを拾おうと手にかけた。すると、天井に突然、灰色のオーロラのようなものが広がり、徐々に快に迫り、そして快を飲み込んだ。

「ここは？」おもわず口にしたその言葉に、返事が返ってきた。「かつて、大きな戦乱がありました。」振り返ると、そこには20歳前半のような青年が立っていた。驚く快をよそに彼は話し続ける。

自分たちの世界の破壊を防ぐため、一人の破壊者に立ち向かった大勢の戦士たちは、仲間とともに、その破壊者と戦いました。」気が付けば、眼下に広がる宇宙は荒野に姿を変えていた。飛び交う光線、鳴り止まぬ爆音、立ち上る黒煙。その中心にある存在に、快は驚いた。快の手にあるリビングで拾った物が、光を放っていたのだ。そ

れは、あたたかくもあり、鋭くもあった。「しかし。」青年がつぶやく。赤と黒の龍がその存在に迫る。だが放たれた光線によつて、一体の龍は地面に叩き付けられる。「その存在は、あまりにも強すぎた。」空中に現れた線路を走る赤い列車が先頭の車両を粉微塵に破壊され、墜落する。また風景が変わった。そこには顔をそむけたくなるほど大量の人々が倒れていた。倒れている人の腰には、ベルトのようなものが巻かれていた。その中央に立つ存在は何のダメージもなさそうだった。「ディケイド。」その言葉に快は何かを感じた。青年は語る。「世界を破壊する存在にして、世界を創造する者。彼はそう呼ばれていました。」「ディケイド・・・。」快はそうつぶやき、「ディケイドと呼ばれる存在を見た。そして「-」あることに気が付いた。快の手にあるものとディケイドの腰に巻かれているものが、全く同じであつたのだ。「ディケイドライバー」という言葉が頭に直接響いた。すると、突然赤い体をした何者が、「待て・・・。」と言い立ち上がつた。「クウガ」というフレーズが頭に響いた。そして立ち上がつた者の名前ということを理解した。いや、思い出したのだ。「ハアアアア・・・・」力を貯めるクウガ、すると周りの砂利、そして倒れている人の体が宙に浮き、クウガの体が赤色から、黒一色になつた。ディケイドと黒いクウガが互いに拳に力を籠め、激突する。そこで風景が宇宙に戻つた。「言い忘れました。僕は紅渡といいます。」青年、紅渡が自己紹介をした。そして「よろしく、天野快。」といった。快には理解できなかつた。（なぜ、こいつは俺の名前を・・・）と思つていて、さらに衝撃的なことを言つた。「いえ・・・、ディケイド。」「-」快に衝撃が走つた。（こいつ、何を言つてるんだ？）「あなたはあの後、空間の亀裂に放り込まれ、行方知れずになりました。搜すのには苦労しましたよ。」渡は苦笑しながら言つ。しかしこれにはそんなことは耳に入らなかつた。（こいつの言つていることが本当なら、あれは俺が・・・。）半ば混乱しながら考へる。そして意を決して問つ。「なぜ、俺がみんなことを・・・？」言つと渡は「創造は破壊からしか生まれませ

ん。あなたが進んだ道には常に破壊と創造があつた。」諭すように言つ。「ディケイド、あなたにここで歩みを止められるわけにはいきません。あなたにはまだやつてもうつことが沢山あります。」突然宇宙が碎けた。驚く快をよそに、渡は続ける。「ディケイド、そろそろあなたを先ほどいた世界に戻します。記憶がないようなら、その世界で集めてください。」渡はそう言つと、快から離れていった。「待ってくれ！俺はまだ聞きたいことが……！」しかし、渡は消えてしまった。一気に視界が暗転する。快の意識は深く沈んでいった・・・。

俺といで壊され破壊者と（後書き）

読んでいただきいて本当にありがとうございます。自分なりの新設定や新キャラもつけていくので、応援よろしくお願いします！

俺と初田と紙の謎と・・・

気が付けば、快は電車の中にいた。「夢か・・・まあ、それならそれでいいんだけどな。」ほつとしたのも束の間、快は抱えている鞄に何やら固い感触があるのを感じた。ガバッ！見てみると鞄の中には教科書、筆箱のほかにリビングで拾つたもの・・・ディケイドライバーが入つていた。（夢じやなかつたああああ！）シャウトしそうになるのを必死にこらえる。傍から見ればそうでもないが、快は今ものすごい勢いで冷や汗が噴出している。なぜ入つていたかはわからないが、持つてきたからにはどうにもできない。（と・・・）とりあえず学校ではれねえようにしないと・・・）転校早々物を没収されるなんて恥は誰もかきたくないものである。とりあえず上に教科書をのせて隠すことにした。（しつかし・・・、これはなんなんだ？）手に持つているのは「2-F」とかかれた紙である。（誰かに聞くにも、文月学園の関係者なんているのか？）キヨロキヨロと辺りを見回す。すると、（おつ）同じ鞄を持つている女の子を見つけた。（女の子かあ・・・ん？）ふと見ると、その女の子の顔がわずかに赤らんでいる。そして首を横に振つている。その後ろには、中年男性がいた。何やら拳動不審だ。（ははあ、なるほど。）気づくが早いが、快はズンズンと他の乗客を押しのけ、女の子の前まで行くと、その手をつかみ「おはよう！元気？」と声をかけた。女の子が「へつ？え？あつ」と言つてる間に、快はその手を引いて、もと来たところへ戻つた。そして隣の両に移つた。そこは比較的人が少なく、二人なら余裕を持つて座ることができた。「ふう」と一息つき、「大丈夫だつた？」と声をかけた。その女の子は、「あつ、はい。助かりました。ありがとうござりますっ！」と心底嬉しそうに返事をした。「うんうん。」とうなずいていると、「あの・・・どうしてその・・・ち・・・痴漢されてるつてわかつたんですか？」と聞いてきた。「ああ、あの君の拳動と、あの変態工口おやじの拳

動を見れば120%痴漢だと分かる。」と答えると「へ・・・変態エロ・・・」と顔を赤らめてしまつた。そして快は、「あ、そうそう。教えてほしいんだけどや、これって何?」問題の「2 F」と書かれた紙を見せた。すると女の子はきょとんとして、こういった「あの・・・、これクラスだと思います。」と言つた。「クラス?」聞き返すと、「はい。2年F組のことだと思います。私と同じクラスですね。」と言つた。「へえ、どんなクラスなの?」聞いてみたらこんな答えが返つてきた。「ええっと・・・その・・・要するにですね・・・2年生の中で、一番お勉強が苦手な・・・その・・・おバカさんがたくさんいますっ!」・・・・・・・「マジで?」

俺と初皿と紙の謎と・・・（後書き）

快、ついに登校です！学校に向かう電車の中でクラスメイトを痴漢から助けた快。この助けた女の子、話しかけでわかると思いますが、誰なのかは次回発表します！

俺とクラスと担任と・・・

ところ変わつて文月学園の最寄駅を少し出たところ。

快は電車の中で助けた女の子と歩いていた。電車を降りてから、お互いが自己紹介をしていないことに気づき、

「あ、忘れてた。俺は天野、天野快だ。」

「天野君ですか。私は姫路瑞希^{ひめじみずき}と言います。よろしくお願ひしますね。」

「コツと微笑みながら自己紹介され、快は姫路に好感が持てた。談話しながら歩いていると、姫路が突然こんなことを聞いてきた。

「そう言えば天野君って、転校生なんですね。前通つてた学校はどんなところでしたか？」

ギクウ！凍りつく快。無理もない。彼は自分の名前以外記憶がないのだ。どう答えたら良いか一瞬思案し、悩んだ末

「あ・・・ああ・・・まあ、遠いところだよ、遠いところ。」

と曖昧に答え、これ以上追究されないことを祈つたが、

「遠いところですか。国外ですか？」

追究されさらに困つた快は、辺りを見回し、必死に考えた。

「え、ええっと・・・そう国外！ロサンゼルス！」

近くの看板に「ロサンゼルス」と書いてあつたので丸々利用させてもらつた。そして追究される前に、

「あ！俺今から職員室行かなきや！じゃまた後でな！」

有無を言わさずその場からダッシュで逃走。

「あ！待つてくださいー！」

というこえが聞こえたが、気にせず、（すまん、姫路・・・）と心の中で謝つておく。

思い切り走つたので学園にはすぐ着いた。快は職員室の前にいる。

「よし・・・」

扉を開け、目の前にいた眼鏡の若くそれなりに美人な女性教師に声

をかけた。

「すいません。 今日からこの学校でお世話になる天野快です。」

すると、

「あ、はい、ではついてきてください。」
と落ち着いた感じで隣の応接室に案内され、来客用のソファに座られた。

「では、少し待っていてください。」

というとその人は応接室から出て行つた。

5分ほどすると、今度は髪を後ろで束ねた老婆が入ってきた。老婆と言つても腰は真っ直ぐでそれほど老いは感じられず、雰囲気から幾つもの年を重ねて見えた。

「あなたが転校生つてやつかい？」

そう問われ、

「はい」

と短く答えた。

老婆は快の向かいに座り書類を取り出し読み始めた。

「天野快・・・1994年7月28日生まれ・・・肉親関係なし・・

・。」

「！」

思わずこのひで記憶の破片を手に入れることができた快はわずかに反応した。

「学歴・・・ほづ、ロサンゼルスの小中一貫校・・・なかなかいいじゃないか。」

出まかせで言つたロサンゼルスが本当にになつていた。一通り書類を読んだ後、

「私がここの中園長、藤堂カヲル（とうじうかをる）だよ。」
と自己紹介をされた。

「はい、よろしくお願ひします。」

「じゃあ、手短に言つけど、お前が入るクラスは・・・2-Fでいいんだね？」

なぜか確認を取られたが、

「はい」

と答えた。すると、

「本当だね？後悔しないね？」

しつこく聞いてくるので、

「はいって言つてゐでしよう。」

とこひらも言い切つた。

「わかつたよ。じゃあもうすぐ朝のH.R.が始まるから、担任の西村先生のところにいきな。」

そう言われ応接室を出ると、そこにはそれなりに身長のある快されも圧倒されるほどの大男が仁王立ちで立っていた。

「私が担任の西村だ。よろしくな。では行こうか。」

短くそういうと踵を返して廊下を歩いて行つた。快はその後ひつき、2・Fの教室に向かつた。

俺とクラスと担任と・・・（後書き）

というわけで、快が電車の中で助けた女の子は姫路さんでした！ほかにも高橋先生やババア長そして鉄人まで登場し、他のメンバーも早く登場させたいです！

そういうえば、読んでいただいたらわかると思いますが、書き方を変えました。読みにくいとの指摘をうけ変更しました。
感想お待ちしております。

俺とクラスと友達と・・・、

「マジかよ・・・」

快は2・Fクラスの教室の前にいるが、教室はものすごく汚い、といふかボロボロだった。

「2・F」

と書かれた木札は片方の金具が外れて、ぶら下がっているし、教室のドアは引き戸ではなく障子だった。しかも、穴が開いている。そこから覗くと、全員、机と椅子ではなくミカン箱と座布団であった。最初の快の発言が、この教室の感想である。そこに、「では、私が呼んだら入つてこい。」

と当然のように、西村先生が入つていた。

「えー、ではHRを始める。その前に、転校生を紹介する。」

『ウオオオオオオオオ！』

世界が揺れたかと思うほどの大歓声だった。

「先生！その転校生は女子ですか！？」

1人の男子が聞いていた。声の弾み様から相当期待しているようだつた。

「いや、男だ。」

『チクシヨオオオオオオオオオオ！』

またもや大きな叫び声が聞こえた。

「じゃあ、入つてこい。」

と呼ばれた。（入りづらいなあ）と思ったが、意を決して障子を開けた。スーッ、ガタン！

なぜか少し離れた位置にある障子が外れた。

『・・・・・』

沈黙。

「あ、あの・・・今日からお世話になります、天野快とあります。よろしくお願ひします。」

(気まずいイイイイ！なんでだあああーなんで関係ない障子が外れるんだああああ！)

「あー、私は授業に必要な道具を持つてくるから、全員静かに待つていろよう。天野は開いているスペースを使え。」

どこか決まりが悪そうに西村先生は教室を後にした。

「ハア・・・・」

溜息混じりにスペースを探していると、

「ここ、空いてるよ。」

と1人の男子生徒が自分の後ろを示した。

「あ、ありがとう。」

快は、もらつたミカン箱と座布団をそこに置き、座った。

「天野君だけ、僕は吉井明久よろしくね。」

「ああ、よろしく明久。」

ここで下の名前をつかつたのは、関係をつくろうとした快の考えである。

「あ、名前で呼んでくれるんだ、じゃあ僕も快つて呼ぶけどいいかな？」

「ああ、そうしてくれ。」

2人が仲良くなるのに、そう時間はかからなかつた。

「へえ、快も1人暮らしなんだ。ぼくと同じだね。」

「お前もなのが、奇遇だな。」

「僕の家族はね、みんな海外で、働いてて、その仕送りで生活してるんだ。でも、そのお金でゲームを買つたりしちゃうんだけどね。はは、と苦笑しながら、明久は言う。そんな明久が、快は少し羨ましかつた。

「そうか・・・家族がいるのか・・・。」

「え、なんか言つた？」

「ああ、いや、こっちの話。」

「ふうん、あ、そうだ、快つてこいつの好き?」

ガサガサ、と鞄を漁り、あるものを快の前に置いた。そこには、

『Hなお姉さんがピー！してズギューン！してあ・げ・る』
と書かれた本、要は工口本があつた。

「ブフォツ」

おもわず吹いてしまつた快。

「いやあ、やつぱり巨乳はいいよね、最高だよ。」

とか言いながら明久は工口本の感想を述べている。そこへ、ゆらり、
とドス黒いオーラが来た。

「へ～、アキつてこいつのが好きなんだ～・・・」

「へ？どしたの美波、つてそっちを向いた瞬間腕が痛いイイイイイ
！」

明久は一瞬で美波と呼ばれるポニー テールの勝気そうな女の子に腕
十字固めを極められていた。

「あ、君転校生だよね。ウチは島田美波しまだみなみ、「ぎやああああ」仲良く
しましょ。」

二口二口と笑顔で言われるが、人に腕を極めているやつに仲良くと
言われても、めちゃくちゃ怖いだけである。

「は、はは・・・よろしく。」

半笑いであいさつする快の横に、

「おい、転校生、あんまりそいつに近づくな。バカがうつるぞ。」

快より大きいが、西村先生よりは小さいオールバックの男子がいた。
「雄二！快に変なこと吹き込まないでよ！」

明久が反論するが、

「何言つてんだ、鉄人の私物売りさばいて、観察処分者になつた大
バカが。」

と軽くあしらわれている。

「鉄人？」

快が聞くと、

「ああ、俺たちの担任のことだ。俺たちはやつに幾度となく鉄拳制
裁をうけ、様々な品を没収された。つたく、あいつの勘の鋭さつた
らないぜ。・・・あ、俺は坂本、坂本雄二さかもとゆうじだ。」

「よろしく雄一。あと、観察処分者ってなんだ？」

「召喚獣が実体化する、と言えば聞こえはいいが、要は学園一の問題児ってことだ。主に教師に頼まれた雑務をこなす。」

「召喚獣？」

「そうか、知らなかつたな。こここの学園長がつくつたシステムでな、生徒の勉強意識の向上を目指してつくられた。生徒はこの召喚獣を戦わせて、召喚獣戦争をする。勝てば設備がランクアップするし、負ければランクダウンする。召喚獣の強さは、生徒次第で、戦争する前にテストを実施して点数を取る。その点数が高ければ強いし、低ければ弱い。」

「へえ、じゃあ明久はバカつて言われてたから弱いのか。」

「ああ、そうだ。」

「ちょっと！さすがにそれは聞き捨てならないな！」

やつと解放された明久だが、

「アキ～、まだ終わってないんだから！」

と今度は足技をかけられていた。

「・・・中々上物・・・」

「うわあ！」

快の横で音もなく明久のエロ本を読んでいる明久ぐらいの身長の男子がいた。

彼は無言でページをめぐり、誰も話しかけられない雰囲気をつくっていた。次のページを開いたその瞬間、ブシャアツ！

突然、彼の顔に血飛沫が舞つた。そして、バタリ！とうつ伏せに倒れ、ピクピクと動いている。

「おい！大丈夫か！？」

快が抱き起すと、震える腕を上げ、グッ、と親指を上に向け、パタリと降ろした。

「おい、雄一、明久、大変だ！」

慌てふためくか快に、2人は、全く気にせず

「ああ、気にするな、こいつは土田康太、いつものことだ。」「はい、ムツツリーー、輸血パック。」

「どうも・・・。」

と輸血しながら、ムツツリーーと呼ばれた彼は、快にあこがれした。

「お、おつ・・・。」

まだ落ち着かない快に、雄二が、

「こいつはとんでもないスケベでな、ショッちゅう鼻血を出してる。しかもあんまりしゃべんないからな、寡黙なる性職者だ。」

「ムツツリーーはね、すごいんだよ。保健体育なら、Aクラスにも負けないんだよ。それ以外は全然だけね。」

明久がそういうと、ムツツリーーは快に名刺を差し出した。そこには彼のと思える電話番号と、こんな文が添えられていた。

「『いつもあなたの真後ろに・・・ムツツリ商会』・・・なんだこれ？」

「こいつが経営している商会だ。そこに電話して依頼すると、金を払えばすぐ写真やらをくれる。」

(何者だ・・・こいつは)

そう思つていると、快の右横に、また一人やつてきた。

「おぬしも気をつけろ、転校生。わしも幾度となく、写真を撮られておる。」

見ると、そこには、おもわず見惚れるほどかわいい女の子がいた。しかし明らかにおかしかった。

「なんで君は女の子なのに男子用制服をきて、武家みたいな喋り方なの？」

そう聞くと、その女の子は、

「わしは男じやー男が男用の制服を着るのは当たり前であろうー」と怒っていた。

「こいつは木下秀吉性別はれつきとした、『秀吉』だ。」

「雄二がそういうと、

「だから男じやーと書いつてやつヒーー。」

とまた怒っていた。

「席に着け、これから授業を始める。」

ガラツ、と西村先生が入ってきた。

「えー、授業に入る前に一つ連絡事項だ、2時限目の現国はなくなる。召喚獣の再調整をするようだ。」

着替えなくていいから、体育館に行くよ。」

『ざわざわ』と教室が少し騒ぐ。

「にしても快、お前、すごいタイミングで転校してきたな。」

雄二が言った。

「何が?」

と聞くと、

「転校早々、学園の醍醐味が味わえるってことだ。」

ともつたいたぶるように言われ、

「だから何がだ?」

もう一度聞くと明久が、

「今度やるんだよ、戦争を、さつき話してた召喚獣戦争をね」と言つて快の問い合わせに答えた。

俺とクラスと友達と・・・（後書き）

みなさんこんにちは、夜なりこんばんは。
ついに主要メンバーを登場させることができました！
次回から、対〇クラス戦が開始されていくので、おたのしみに！

俺と検査と丸腰と・・・、

1時限目の英語は、西村先生が少し遅く来たこともあり、プリント学習になつた。

（どれどれ・・・）

快は送られてきたプリントに目を通す。そこには、バラバラの単語をつなげて文を書く問題や、英文の読解問題があつた。快はなぜかすらすら解くことができ、あつという間に終わってしまったので、自分の記憶について考えていた。

（俺はどうやら自分自身の記憶は生年月日と家族がないことしかないが、学力はそれなりにあるな・・・、いや、そんなことよりも、あの紅渡とかいうやつの「記憶は」の世界で集める」という言葉も気になる・・・。）

考えていると、

「よし、では今日はここまでだ。全員次の时限は体育館に移動だぞ。いつの間にか授業が終わっていた。皆席を立ち、体育館に向かうようだ。

「快、行こう。」

「ああ、ちょっと待つてくれ。」

明久に誘われ、快も立ち上がり、体育館に向かうのだった。

文月学園の体育館は、天井が通常より少し高い程度で、あとほどここにでもあるような感じである。

「じゃあ、召喚獣の再調整を始めるよ。1人ずつ前に出て、召喚獣をだ出しな。」

先に来ていた学園長がそういうと、雄一が発言した。

「おい、ババア、なんでつい最近やつたばかりの調整をまたやるんだ？」

後ろから学園長をババア呼びする雄一に快は驚いた。

「まったく・・・、ババアと呼ぶなと言つてゐだら、毎度毎度。」

嘆息しながら答える学園長は、不満げにこう答えた。

「召喚システムに異状が生じてね。閲覧不能な正体不明のデータがシステムに食い込んでるんだよ。あんただちクソガキジもの召喚獣に異状がないか確認だよ。」

「正体不明？ 消去できないのか？」

「ああ、消去しようとしても全然ダメなんだ。まるでシステムに守られてるみたいで、気味が悪いよ。まったく、誰があんな悪戯を・・・、まあそういうことだ、さつさと召喚獣出しな。」

（召喚獣つてどんなのだろうか・・・）

少しづくワクしながら、快は見ていた。

「サモンッ！」

一番最初に前に出たやつがそういうと、ポンッ！と尾が生えた二頭身ぐらいの人形のようなものが幾何学的な紋様から飛び出した。棍棒に武術家のような出で立ちだった。

「おお」

思わず、感心したように声を出した快は、あることに気付いた。その召喚獣は、呼び出したやつにそっくりなのである。

「うん、異状はないね。次のやつ出な。」

「あ、はい。サモン！」

次に前に出たのは姫路であつた。ポンッ！とさつきと同様に召喚獣が飛び出てきた。姫路の召喚獣も、姫路にそっくりで、大きな剣と鎧でしつかり武装されていた。先ほどのより明らかに強そうだった。

「・・・異状なし。次。」

数人検査していよいよ快の番になつた。前に出ると、周りから

『あいつの召喚獣つてどんなだろうな』

といふ視線がきた。

「よーし、サモンッ！」

勢い良く叫んだ。そしてポンッ！出てきた召喚獣は・・・なんと武装を一切着けておらず、普通に制服姿だった。

「…………え…………？」

一瞬何が起こったのかわからなかつた。学園長もきょとんとしている。

「あ……、まあ、異状は……ないみたいだね。次。」

学園長は次を促した。がつくりとうなだれながら戻つた快の横に「ドンマイ。」

という言葉とともに、雄一と明久がやつってきた。

「す」かつたね、快の召喚獣、雄一のより丸腰だつたよ。」

「ああ、俺のはメリケンサックがついてるからな。」

「・・・武装があるだけマジだろ・・・ハア。」

ものすごい落ち込み様の快を励まそうと話しかけたが、さらに快を傷つけた。

「あ！ あそこにフィールドがあるから、快、ちょっと手合せしてよ。外見だけで、意外と強いかもしれないよ。」

フォローするように明久が快の背中を押した。

「あ、ちょっと・・・」

快は半ば無理矢理、フィールドの中に入った。

「いくよ～、サモンッ！」

「どうなることやら・・・、サモンッ！」

フィールドに改造学ランと木刀の明久の召喚獣と、清々しいほど丸腰の快の召喚獣が現れた。

『総合 天野快 486点

吉井明久 293点』

お互いの点数が表示される。

「先手必勝！、いくよ、快！」

思い切り踏み込み、木刀で鋭い突きをしてきた明久の召喚獣の攻撃を防ぐために、腕を前でクロスさせた快の召喚獣は、ドツーと腕で受け止めようとした。ズキリ、と腕に衝撃が来る。

「グツ！」

腕に痛みを覚えたがこらえようとする。だが、

「ハアア！」

さらに前に押され、吹っ飛んでしまう快の召喚獣はそのまま快に目掛けて飛んできた。その時、快の頭の中にディケイドライバーが浮かんだ。一瞬、それに意識を集中してしまい、「危ない！！」

自分の召喚獣が飛来するのをよけれなかつた。

「グハアツ！」

思いつきり快の腹に直撃した召喚獣はそのまま快もろともフィールドの外に飛び出し、そのまま明久の勝利となつた。

「あれ・・・、勝っちゃつた。」

驚いている明久の近くに雄一が近づき、

「勝っちゃつた、じゃねえよこのバカ！素人に本氣出しあがつて！」

バシ！と思いつ切り頭をはたいていた。

ギヤーギヤーと2人が言い争つているところに、学園長がやつてきた。

「おかしいねえ、召喚獣が実体化するのは吉井一人のはずなんだけどね。」

不思議そうに仰向けに倒れている快の横で腕を組んでいる。手に持つていたノートパソコンで快の召喚獣をチェックし、何も異状がないことを再確認する。

「召喚獣の設定はランダムに決まるからね、あんたのは実体化して、痛みがフィードバックして、丸腰、つていう設定になつたんだろう。ま、こればかりはどうしようもないね。ほら、じゃあもう全員教室に帰んな、授業に遅れるよ。」

パンパン、と手をたたき、教室に帰ることを促している。

「ちえ、もつと強そうなのがよかつたな。」

「悪いな快、こいつはどうも手加減というものを知らないらしい。「ごめんね、快。痛かった？」

「ああ、大丈夫だ。気にするな。」

笑つてみせる快に、ホッとしたように笑つた明久と雄一であつた。

そして自分が残った体育館で学園長は、

(おかしい、あれほどの点数があれば何か武装があつてもおかしくない、一体何が原因だろうね?)

と、快が弱い原因を模索した。

時間は少し戻り快が初めて召喚獣を出したとき教室では、ポウツ、
と快の鞄の中に入っていたディケイドライバーが淡く光を放つてい
た。それはすぐに収まつたが、何かに反応しているようだった。

別の場所では、一人の中年男性が

「おのれ〜・・・許さんぞあの小僧!」

と激昂していた。すると、男の体の形がだんだんと人の形を失い、
緑色をした、虫とも人とも見れない姿に変貌するのだった。

俺と検査と丸腰と・・・、（後書き）

どうもみなさんこんちは！

ついに快の召喚獣がお目見えです！丸腰設定でしかも明久と同じ状況となっていますが、これが後々重要になってしまいます。そして快に迫る不穏な影、次回もお楽しみに！

感想お待ちしています！

俺と飯と化学兵器と・・・、

快の召喚獣がものすごく弱いことが判明して、3時間ほどたつた。今はお昼休みである。

「・・・そういうば飯持つてきただつけ？」

快は先ほどのことから立ち直り、明久たちと昼食をとる約束をしていた。したはいいが、自分が食べ物を持っているか定かではないことに今しがた気づいた。ガサガサ、とティケイドライバーを見られないように注意しながら漁ると、

(一)

声にも顔にも出さなかつたが、鞄の中に先ほどまで入つてなかつたパンがあつた。

『漢のヤキソバパン！』

と袋に書いてある鞄にギリギリ収まる大きな焼きそばパンだつた。
(なんでだ、さっきまで入つてなかつたぞ・・・。)

まあ、でも。とあまり気にせずそのパンを持って、明久達が集まっている教室の隅に向かつた。

「お待たせ。」

「あ、快、こっち座つて。」

明久は、自分の隣を示した。

「サンキュー」

快はそれを受け、明久の隣に座る。明久の膝の上には、弁当箱が置いてあつた。明久は、なれた手つきで包みを開き、弁当箱を開けた。

「！」

快はその中身に絶句した。なんと、弁当箱の中身は乾麺を半分に切つたものだつた。

「いただきます。」

丁寧に手を合わせてから、乾麺をバリボリと食べる明久に驚き、近くでそれを見ていた雄二に聞いた。

「なあ、こいつの飯つていつもこいつなのか？」

「ああ、そうだな。まあこれでもマシなほうか。この前は塩だけだつたことがあつたぞ。」

「塩だけ・・・」

「流石にあの時はみんなで弁当分けてやつたな。」

「じちそうさま。」

いつの間にか食べ終わっていた明久の前に近づき、「食うか？」

焼きそばパンを半分差し出すと、

「いーの！？ホントに！？ありがとうーすいぐれしこよー。」

と半泣きで感謝された。そこに・・・

「あの、明久君、よかつたら私の作ってきたクッキーも食べますか？」

小さな包みを持参して姫路がやつてきた。すると明久は、

「あ・・・、ああ、その・・・気持ちだけ受け取るよ・・・。」

と姫路から目をそらして言った。

「あ・・・、そうですか・・・。」

残念そうに戻るつとする姫路を見て、

「おいおい、明久、さすがにそれはかわいそつだろ。姫路、俺にも一個くれ。」

快は包みに手を伸ばし、クッキーを手に取り、口に運んだ。

『や、やめろー！』

雄一と明久の声が聞こえたが、快はもうクッキーを咀嚼していた。

「うん、なかなかうまいじゃ・・・」

バタン！言葉の途中で快は倒れて、そのまま動かなくなつた。

「だから言つたのに、つたく・・・」

雄一が言い、

「あれ？明久君、天野君が動かなくなつちゃいましたけど・・・」

姫路が明久に問う、

「えへっと、あの・・・、きっと美味しそぎて昇天しちゃつたんだ

よ！ねえ！雄一！」

「あ・・・、そ、そうだな、うん、そうに違いない。」

「そうなんですか？美味しくて倒れちゃつたんですか？」

3人はそんな会話をしていたが、ガバアッ！と言葉のとおり、昇天していた快が目覚めた。

「なんだ、今のは！？」

「あ、起きた。」

「案外、頑丈だな。」

「あれ、俺、明久にパン分けて、そしたら姫路が来て・・・、あれ？」

「あの〜、天野君、大丈夫ですか？」

目覚めた快に、三者三様の言葉をかけるすると、キーン、コーン、カーン、コーン、と予鈴が聞こえた。

「あ、授業始まっちゃいますね。じゃあ私はこれで。」

姫路が戻ろうとする姫路を見送り、

「なんだつたんだ、あれは・・・」

と感想を述べる快に、

「あれは姫路の化学兵器だ。」

と雄二が答えた。

「化学兵器！？俺、そんなもん食つたの！？」

「まあ、化学兵器って言つても、作り方がちょっと違うだけなんだけどね・・・」

「どんだけオリジナリティ溢れた作り方したら化学兵器になるんだよ！？」

そんな会話を姫路に聞こえないようにしていると、

「あ、もう一個食べます？」

姫路が聞いた。それに男3人は、

『あ、ああ、いや大丈夫。』

と力なく答えるだけであった。

俺とい飯と化学兵器と・・・（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます！

ごめんなさい！まだちょっと戦争編には入れませんでした。

転校初日姫路の化学兵器を味わった快は次回ついに初変身です！

次回もお楽しみに！

俺と仮面と変身と・・・、

「じゃあ、またね。」

「ああ、またな。」

快が姫路の手作りクッキー（化学兵器）を食べてから、時間は経ち、放課後、快は明久と一緒に帰ることを誘われ、共に下校した。快は電車なので駅の前で別れた。

（まあ、初日にしては、よかつたかな。）

（思いながら、快は電車に乗り込む。）

（そういえば、今朝は、姫路を痴漢から助けたつけ・・・）

（そうそう、明久があの工口本の話したら、島田にプロレス技かけられてたな。）

（そしたらムツツリーーがその工口本みて鼻血吹いてたな、あれはビックリした。）

そんな他愛のないことを思い出しながら窓の外の風景を見ていると、鞄の中の固い感触、ディケイドライバーが快を現実に引き戻した。

（破壊者、か・・・）

快は、自分の置かれた状況を確認した。快には、彼、紅渡の言葉が引っ搔かっていた。

『記憶がないようなら、この世界で集めてください。』

（いう言葉について、快は疑問を持った。）

（俺の記憶がこの世界に散らばっている？もしそうなら、どうやって集めるんだ？）

快は渡に聞きたいことがまだたくさんあるのだ。なぜ、俺は記憶を失ったのか、なぜディケイドになつたのか、など挙げていけばキリがない。

そういひしている間に電車は快の降りる駅に着いた

（まあ、気にもしようがない。次にあいつに会つたら聞いひ。）

そう考えをまとめて、下車し、改札通り、駅を出た快は一步田で

立ち止まり、

「あ」

と思わず声を出した。とんでもないことに気付いたのである。
(どうやって、帰るんだ……?)

そう、快は渡と別れたあと、気が付けば電車に乗っていたのだ。電車の往復は、定期券に書かれていた駅を利用しただけである。どうしようかと途方に暮れていると、ポウ、とティケイドライバーが淡く光った。

「?」

それに気づき、鞄を覗いた快の脳内に、

「!」

早送りのような映像が流れた。堰から水が流れるような感覚を覚えた時には、快は帰宅ルートを完全に把握していた。いや、思い出したと言つべきか。

「このいつ時、変に気が利くな、お前は。」

そう言いながら、快は駅を後にしたのだった。
しばらく道を歩いていると、路地裏から、

『いや！離して！』

『おとなしくしろ！』

と、何やらただならぬ雰囲気の会話を耳にした快は、路地裏を覗き込んだ。

「!!」

そこには中学生のような女の子の腕を1人の男が掴んでいた。快が驚いたのはそこではない、腕を掴んでいる男のほうである。

『あいつは・・・！』

その男は、快が今朝、姫路を助けた際に姫路に痴漢をしていた中年男である。

『おい！何やつてんだ！！』

快がそう叫ぶと、男はバツ、とこちらを見た。

『お前、まだ懲りてねえのか！』

快がそう言つて近づいてみると、

「チツ！」

と舌打ちをして、襲われていた女の子を引っ張りながら、走つて逃げた。

「逃がすかよ！」

快も追いかける。

狭い路地を走り、男を追ひ、着いたのは廃工場のような場所だつた。

辺りを見回すと、廃材を積んだところに、女の子が横たわっていた。近づこうとしたその時、ザツ、と中年男が快の前に立ちはだかった。

「この俺の楽しみの邪魔しやがつて……！」

激しく怒つている男に快は、

「へつ、女の子を撫でまわしてることが楽しみなんて、お前、人として恥ずかしくねえのか？」

とわざと挑発するように言つた。すると男はニヤ、と不敵に笑つた。

「残念ながら、俺は人じやないんでな。俺は人間なぞよりもはるかに上の存在だ。」

「は？ 何言つてんだ？ 明らかに下等だろ。」

「減らず口が言えるのもそこまでだ！」

そう叫ぶと、男の体が見る見る変わつていつた。その体は緑色に変化し、腕には長い鉤爪のようなものがついていた。

「なつ！？」

「ククク・・・、俺はワーム、人間に擬態し、その命を奪う、この姿、見られたからには貴様を生きては帰さん！」

ビュン！と鉤爪が快へ襲い掛かる。快は横つ飛びでそれを躱し、近くに転がつていた鉄パイプを手にし、振り上げながら立ち向かう。

「ヤアッ！」

ガキイン！ワームの頭部に鉄パイプがヒットする。

「どうだ！」

「ふん、そんなものの効かん！」

バキッ！快は思い切り殴られ盛大に吹っ飛び、鉄パイプを落としてしまう。

「ぐあつー！」

地面に叩き付けられる快に、ワームは笑い、「クク・・・、すぐに楽にしてやる！」

ビキ・・・ビキビキビキ！と体に亀裂が入り、また体が変わった。フォルムは先ほどより細くなり、背中には虫のような羽が生え、両腕にはカマキリのような鋭い鎌がついていた。

ザシユツ！と鎌を快目掛けて、振りかざす。何とかよけるが、今度は蹴りが快の顔面にヒットした。

「ガツ・・・」

またもや吹き飛び、ボロボロになつた快の周りに鞄の中に入つていつものが散乱する。

「貴様のよつな子供に、《クロックアップ》を使つまでもない。なぶり殺しにしてくれ。」

ゆつくりと近づいて来るマンティスマーモを前に、

（何かないのか・・・）

圧倒的に不利な快は、何か役立ちそうなものを探す。すると、

「！」

近くに『ディケイドライバー』が転がっている。そしてそれに吸い寄せられるように手に取つた。そして、

「こうなつたら、ダメもどだ！」

快は『ディケイドライバー』を腰につけた。すると、勝手にドライバーは腰に巻きつき、その横に何かが着いていた。『ライドブッカー』という言葉が頭に響き、それを聞いた。また、記憶が戻る。（懐かしい・・・、俺はこれを使うときいつもこう言つていた。そうだ、あの言葉だ！）

快は、ライドブッカーの中から一枚のカードを取り出し、ワームに見せるように構えた。

「バカな！？貴様、まさか！」

マンティスワームは一步後ずさつた。

快は深呼吸して、叫んだ。あの言葉を、人々を守る戦士が言っていたあの言葉を。

「変身！」

ドライバーを回転させ、カードを入れる。そしてまたドライバーをもとの位置に回転させた。

『カメンライド・・・ディケイド！』

電子音が響き、快は灰色の装甲に包まれ、それはマゼンタのカラーになり、その姿を現した。

「これが・・・ディケイド・・・！」

世界を破壊し世界を創造する力を持つた戦士、『仮面ライダー』ディケイド』がこの世界に降り立つた。

俺と仮面ヒッポー・・・（後書き）

みなさん、お待たせしました！

仮面ライダー・ディケイド、いよいよお目見えです！いやあ、長かつた！

次回はディケイド対マンティスマーブルのバトルをお見せします。ご期待ください！

俺とバトルと仮面の力と・・・、

「これが・・・ディケイド・・・！」

快は自分の姿に驚嘆する。一方マンティスワームは
「バカな！貴様、仮面ライダーだったのか！？」

と驚愕を露わにし、おもわずそう独りごちた。

仮面ライダーという言葉が、頭に響き、快にまた新たな記憶がよみがえった。怪人の種類と、その知識、そして、戦い方である。快はライドブツカを開き、一枚のカードをドライバーに装填した。

『アタックライド ブラスト！』

電子音が鳴り、ライドブツカはガンモードとなり、快はその引き金を引いた。

「くらえ！」

銃口から無数の光弾が打ち放たれ変則的な軌道を描きながらマンティスワームの両腕の鎌に命中する。

「グアアッ！」

鎌が粉々に碎け、自身もがれきの山に突っ込んだワームはがれきをまき散らしながら立ち上がった。

「おのれ・・・こくなれば！」

快に走り出したと思った次の瞬間ワームは見えなくなつた。消えたのだ。正確に言えば、人には見えない不可視の領域に到達する能力、クロックアップを発動したのだ。快が反応するより早く攻撃に転じたワームは正面、横、後ろからと攻撃をたたき込んだ。

「ウワア！」

快は攻撃を受け、ワームより後方に吹き飛ばされる。快はクロックアップに対応できるカードを考えながらブツカーを開き、カードを取り出した。するところの状況では中々ありがたいカードが出てきた。

「へッ、10秒でカタをつけてやるぜ！」

『フォームライド ファイズ！アクセル！』

電子音が鳴り、快が姿を変えた。仮面ライダーファイズの高速移動形態、『アクセルフォーム』となつた快は腕のアクセルウォッチのスイッチを押した。「10」の文字が出てくる。

『READY · · · GO!』

快はアクセルフォームの力を完全に把握していた。10秒間だけ超高速移動が可能となるが反対に言えば、10秒で決着をつけなければならぬことも分かつていた。

「ハアアツ！」

快はワームに接近し、パンチやキックを浴びせた。

「グッ！」

ワームがよろけたところに、強い蹴りを入れ、上空に蹴り上げる。ここまで4秒使つた。残り6秒。

快は新たなカードを取り出した。そして装填する。

『ファイナルアタックライド フアファアファイズ！』

快もワームを追うように跳躍し、それを追い抜く、するとワームの周りには、赤い円錐のような光がワームを取り囲むように点在した。そこに鋭い飛び蹴りを浴びせ、着地し、標的が落下する前に、また飛び上がり、蹴りつけるという動作を超高速で行うことで、快が何人もいるように見えるようになる、『アクセルクリムゾンスマッシュ』を浴びたワームが落下する前に

『3 · · · 2 · · · 1 · · ·』

とカウントダウンが差し迫り、

『TIME OVER』

の音声とともに、ワームが空中で爆散した。

戦いが終わり、快は変身を解いた。

「すごい···これがライダーの力···。」

そう言つと、意外な返事が返ってきた。

「お見事です。ディケイド。」

振り返るとそこにはあの青年、紅渡の姿があつた。気が付けば、

周りの風景も廃工場からあの地球が幾つもある宇宙になつっていた。

「そうです、これがディケイドの力、ライダーの力を完全に手中に収め、使用する。破壊者でもあり、創造者でもあるから可能なのです。」

渡は語り始めた。快は、彼のペースに流されまいとこちらから質問を投げかけた。

「ああ、確かにすごい。だが、なぜ俺はこの力を使える？なぜ俺はディケイドなんだ？」

すると渡は意外そうな顔をしてから、フツ、と微笑んだ。
「そうでしたね、まだあなたに伝えていませんでしたね。分かりました、お教えしましょう。」

言うと、また風景が変わった。

荒野に2人の戦士が向かい合っている。ディケイドと、黒いクウガ、クウガアルティメットフォーム

である。互いの拳に力を籠め、同時に激突する。

「・・・この風景はこの前見たぞ。」

快は言うが、渡は気にせずという感じで、

「はい、しかし次が重要です。」

と言つてそのビジョンを見るよう促した。快は、2人の激突の続きを見た。

大きな爆発が起こり、辺りが煙に包まれる。煙が晴れると、ディケイドとクウガは仰向けに倒れていた。どうやら相討ちらしい。すると、ビキ！ビキビキビキ！バガーン！と空に大きな亀裂が入り、一部が碎けた。「オオオオオ！ものすごい勢いでその穴の中に吸い込まれていくディケイドとクウガ、

「あなたとクウガの激突のエネルギーで世界を保つ力が不安定になり、世界に亀裂が生じた。」

快と渡も追うように亀裂に入していく。ディケイドとクウガは互いに別々の方向に飛んで行った。すると、共に吸い込まれた岩がディケイドをかすめ、ライドブツカが開いた。バサバサとカードが散らばり、ディケイドを取り囲むように展開した。そしてそのままデ

イケイドは一つの世界に落ちて行つた。そこでビジョンは終わった。

「ディケイドが落ちて行った世界はどうだかわかりますか？」

渡が問い、

「・・・、俺がいる世界・・・。」

と答えた快に

「そうです、見つけるのに苦労しましたよ。はるか遠く、ライダーとは関係ない世界にいたんですから。」

と話す度に快は業を煮やし、まくしたてるように言った。

「だからなぜ俺はディケイドなのかと聞いてるだろー！」

すると、渡は落ち着いてこう答えた。

「ディケイド、あなたに記憶を集めるように言ったのは僕です。しかし、まだ知つてはいけない記憶もある。それを知つてしまえばあなたはあなたでなくなるかもしません。」

一瞬、どういうことだ、と言いたくなつたが、何やら、先ほどとは違う雰囲気に圧倒され、閉口している快に、今度は優しく微笑みながら言った。

「あなたには、そんなことよりやらなければならないことが沢山ある。先ほどの戦い、あなたはワームと戦い勝ちました。しかし問題はそこではなく、なぜワームがいたかです。」

「…」

快は瞬時に理解した。

「そうです、先ほど見せた世界の亀裂を通り、あの世界までやつてきたのです。あなたにはそれを駆逐してもらいたい。あなたにはすでにあの世界との関係が出来上がつている。」

快の脳裏に明久や雄一達の顔が浮かぶ。

「・・・・・、分かった。」

沈黙し、短く答えた快に、安心したように笑い、

「では、頼みましたよ。あなたの力で守つてください。あの世界を・・・」

そう言い、立ち去りうとする直前

「あ、教えてあげれなかつた代わりと書いてはなんですが、プレゼントを用意しておきました。楽しみにしておいてください。では。」
と言い、渡は今度こそ立ち去つた。風景もいつの間にか路地の入口まで戻つてきていた。

「・・・やつてやるよ、くそつたれ。」

快は小ちくづぶやき、決意を固めたのであった。

俺とバトルと仮面の力と・・・（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！

快、初勝利です！書いていて興奮しました！最後のアクセルクリムゾンスマッシュは私の好みです。

次回からは、いよいよ、長かった序章を終え、戦争編が始まります。お楽しみに！

俺とバイクと俺の家と・・・、

マンティスワームとの戦いからじばらく経ち、快は自宅のすぐそこまで来て、ふと思い出した。

「・・・そういえば、プレゼントってなんだ?」

楽しみにしている、と言わされたのでそれなりに楽しみにしながら自宅の前に着くと、玄関前に大きなバイクが置いてあった。

「・・・もしかしてこれが?」

そのバイクに触ると頭に『マシンディケイダー』という言葉が響いた。これは、ディケイドが乗るバイクのようだ。

「プレゼントというのはお前か?」

冗談交じりに話しかけてみた。すると、ブオオン、と、まるで肯定するかのようにアイドリングした。キーも刺さつてないのにもかかわらず。驚いた快はしげしげとバイク、ディケイダーを観察しあることに気付いた。鍵穴がないのである。ならばどうやって先ほどアイドリングしたのか、考えていると、さらに気付いた。座席部分から見ると、視界の下にディケイドのマークがあり、それに触ると、ディケイダーは小さくなり、快の手の平の上に収まるサイズになった。

「まあ、場所取らないから便利だな。」

そう切り上げ、扉を開き、ディケイダーを手に家に入る。リビングに入ると、もう一つ重大なことに気付いた。

「・・・そういえばバイクもらったのは良いんだけど、免許は・・・?」

そう、バイクに乗るには、免許も必要になつてくる。しかし、その心配は杞憂に終わつた。テーブルの上に封筒が置いてある。開けてみると、免許証、しかも快の名前で記名されていた。その免許証に触れた途端、快の頭にまた堰を開け流れ出る水のような感覚が感じられた。その感覚が終わるときには、快は免許取得に必要な知識をす

べて記憶していた。今ならビニでも行けそうな感覚もあった。

「便利だな。やつぱり。」

と、口にすると、カサ、ともう一つ何かが封筒から出てきた。またさらに一回り程小さい封筒であった。開けると手紙が入っていた。封筒の裏には『紅渡』の名前があった。文面は

『プレゼントは気に入りましたか、ディケイダーは燃料を積んではいません。クライインの壺と呼ばれる機関から無尽蔵にエネルギーを取り出せるので、ガソリンスタンドに行く必要はありません。そして、あなたの意思がなければ動かないようになっています。あなた以外は動かせませんからあしからず。』

「まあ、そういうことなら」

快は、このプレゼントをありがたく頂戴することにした。

「さて、いつまでも制服姿じやアレだな。着替えるか。」

そう思い、2階に上がり、自分の部屋に入った。ここですぐに快の部屋と分かつたのは、2階の扉がすべて開いており、1つの部屋以外には何も置いてなかつたからである。自室は、1人用ベッドがあり、勉強机があり、ベッドと、机の近くには窓があり、クローゼットが部屋の入つてすぐのところにあつた。広さとしては、広すぎず、狭すぎない、それくらいの広さだった。クローゼットを開き、Tシャツとジーンズに着替えた快は、自分の家を探検することにした。2階は快の部屋以外は空で、それほど気にはならなかつたが、1階はまだちゃんと見ていなかつたのでまずは台所から捜索した。

「どれどれ。」

ガラッと棚の扉を開けると、パスタや調味料などが出てきた。食器棚には皿はもちろん、箸、スプーン、フォーク、ナイフなどがあつた。

そして、冷蔵庫を開くと、卵、飲み物、肉、野菜などがきれいに整理されて入つていた。量もそれなりにあり、食糧不足はないらしかった。

「ふむ。」

次はリビングのテーブルの横にある棚を開けた。そこには『○?銀行』と書かれた封筒が幾つかあり、開くと小銭、千円札、五千円札、一万円札に分けられて入っていた。どうやら貯金もできているらしく金欠というわけでもなさそうだった。

「結構、マメなやつなんだな、俺つて。」

家を一通り探検した後、小腹が空いたので、もぐもぐと菓子パンを食べながらテレビをつけると、

『任務了解、これより破壊する。』

とアニメが放送されていた。タイトル表記は『新機動戦記ガンダムW』。再放送らしく、画は少し古い。

「へえ、結構面白いじゃん。」とかいいながら、菓子パン片手に快は『ガンダム』を見るのであった。

俺とバイクと俺の家と・・・（後書き）

みなさん、こんにちは！夜ならこんなばんは！
今回は快の家の詳細を説明しながら、快がバイクを手に入れるお話を書かせていただきました。ほんの少しだけガンダムが登場しました！
次回は、快が自分の召喚獣の秘密を知ります。
ご期待ください！

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・、

日付が変わつて次の日の朝、

「・・・おはよー・・・」

快はげつそりとした顔で教室の障子を開けた。

「どうしたのさ、快、なんかやつれてるよ?」

心配そうに話しかけてくる明久に、

「ああ、まるで徹夜の後みたいだぞ。」

と雄二もやつてきた。

「いやな、昨日家に帰つてテレビ点けたら、めぢやくぢや面しれえアニメやつてよ・・・見まくつちました。」

答える快は、昨日あの後、アニメ、『ガンダムW』を見続け、どハマリしてしまつたのだ。しかもなんとそれは、18時30分から朝の5時30分まで一挙放送というとんでもない長時間スペシャルだったのである。途中、食べ物は食べたが、何を食べたかすら覚えてはいないほど、食い入るように見てしまつたのだ。おかげで、快はビックリする位寝不足である。

「へ・・・・へ・、快つて結構ハマるとことんハマるタイプなんだね・・・。」

快の意外そうな一面を見て、驚く明久と、

「まったく・・・、転校初日から何やつてんだか・・・。」

とあきれる雄二、それに反抗するように

「おいおい、ウイングのはすげえんだぞ。ツインバスター・マジパねえ。」

と全く説得力のない発言をする快。そこに、

「まったく・・・、おぬしは戦争前に何をやつとるんじや。」

と男装した美少じょ・・・じゃない1人の男子、秀吉がやつてきた。

「あ、秀吉。おはよっ。」

「よう、秀吉。」

挨拶を交わす明久と雄一、快も少し遅れながら

「ああ、おはよう秀吉。」

と言葉をかける。

「そうだぞ、快、今度の相手はロクラス、それほど賢くはないが、俺たちよりは数段賢い。今日は、一日何もないからな、みんなで模擬戦をやろうと思って呼んだんだ。」

「ああ、分かってるつて。」

昨日、帰り際に、雄一、明久、ムツツリー、秀吉等とアドレスを交換した快は、今日の朝、ガンダムを見終わり、シャワーを浴びて一息ついたところで、雄一からメールが来て、こうして休みの日に、学校に来た次第である。

「ババアからは申請は取つてある。午前中だけなら体育館を使っていいんだとよ。」

「ふうん、それにしても、よく許可がおりたな。」

「以前から考えていたことだしな。ババアからすれば少しでも多くのデータを取つておきたいんだろ。」

「そういうことか、まあでも、俺、召喚獣がアレだしな・・・。と肩をすくめる快の脳裏にはあの丸腰で制服姿の自分の召喚獣が思い出される。

「まあ、その点についても、もう少し調べてみようと思つ。鍵は姫路と島田・・・後ムツツリーが取りに行つてるから、俺たちも行くぞ。」

そう言って、教室を出していく雄一を追つて3人も体育館へ向かった。そして、体育館で姫路、島田、ムツツリーと合流し快達は早速模擬戦を始めることにした。

「召喚許可はババアからもらつてるし、フィールドもタイマー式で12時まで使えるようにしておいてもらつてる。点数は模擬戦だから無制限だ。行くぞー。」

「サモンー。」

全員の召喚獣が幾何学的な紋様から飛び出す。明久、雄一、姫路の

召喚獣は検査の時に見たことはあつたが、秀吉、島田、ムツツリーの召喚獣は見たことがなかつたので、快はチラ、と彼らの召喚獣を見る。秀吉の召喚獣は侍のよつた姿で、日本刀を持つている。島田のは軍服にサーベルという姿。そしてムツツリーは忍者のような姿に小刀というそれぞれしつかりした装備を着けている。

「それに比べて俺は・・・」

快の前には丸腰制服姿の召喚獣がいる。やはりとても頼りない。「じゃあ、とりあえずウチとアキが見本を見せるから見てて。」と島田が前に出る。

「え、僕？まあいいや、よーし、いーいー美波！」

明久も召喚獣に木刀を構えさせる。

「行くわよー、それっ！」

島田の召喚獣が明久の召喚獣に肉薄する。ガン！ガキン！とサーベルと木刀がぶつかり合う。しかし、所詮、木と鉄である。明久の召喚獣の木刀はすぐに折れ、明久はピンチに陥る。ビッ！とサーベルが明久の召喚獣の首元に置かれる。

「勝負ありね。アキ。」

「くッ、やるじゃないか美波！」

「と、まあ、ざつとこんなもんかしら。」

召喚獣を消して島田が言つ。

「すごいよ美波、扱いが前より上手くなつてるね。」

と明久がほめると、

「え！、そ・・・そつ？」

と照れるよつな仕草をし、顔を赤らめた島田。すると

「お姉さまに近づく豚め・・・、殺す！殺します！」

「うわあ！？」

快の横に黒いオーラを放ち、明久を睨んでいるの女子がいた。そしておもむろにシャーペンを取り出し、それを投げナイフのように明久に向かつて投げた。

「危ねえ！」

咄嗟に手でそれを払つた快に、

「何するんですの！？」

と食つて掛かる女子に、

「それはこっちのセリフだ！そんなもん人に投げようとして…」

快は強く言つた。

「美春…！」

と美春と呼ばれた女子に島田が近づいた。すると、

「お姉さま！大変凜凜しゅうじぞいましたわ！」

と先程とはまったく違うキラッキラした目で島田を見ていた。

「島田、知り合いか？」

快が問うと、抱きつこうとしてくる女子を抑えながら

「うん、清水美春(しみずみはる)って言ひの。いつもウチにこうやってくるから大変なの。」

「何を言つてらっしゃるんですの！私はお姉さまとの愛を確かめて

いるだけですのに！」

「アーッ、もう抱きつかないの…」

グイーンと引きはがされ、ふと田があつた快を見て、清水は島田に聞いた。

「お姉さま、誰ですか？この見慣れない薄汚い豚は？」

「豚つて…・・・。」

「ああ、こつちは昨日転校してきた天野快つていうの。」

「おい、豚のところスルーか！」

「ふうん、転校生でしたの。道理で見かけない面だったわけですね。ま、戦争前に転校生の1人や2人来たところでこの私が軽く捻つて

やりますわ。」

自信あり気に清水が言つ。

「自信満々じゃねえか。言つてくれるね。」

快が言い返すと、

「ええ、なんなら今ここで模擬戦の相手をして差し上げてもよろしいですわよ。」

とさりに言つてきた。そして、快の足元の召喚獣を見て、フツ、と笑い

「まあ、そんな弱そうな召喚獣に負けるはずありませんがね。」

と挑発するように言つた。

「いいぜ！相手になつてやるよー。」

快はその挑発に乗り、清水と対決することになった。

「ちょっと、雄二、止めなくていいの？快、負けちゃうんじゃない？」

「そうじやぞ、雄二、勝負は日に見えておる。」

「・・・無謀。」

「そうですよ坂本君、天野君の召喚獣は痛みのフィードバックがあるんですよ？」

「そうよ坂本、美春のことだから」「んぱんにしちゃうわよ。」

明久たちが快を案じて雄二に抗議する。しかし雄二は気に留める様子もなく、

「いや、」そのままやられると、実を言つと、ババアから頼まれてなあいつの召喚獣についてこっちで調べておけって。まったく、人使いの荒いババアだ。」

と言つて2人の対決が始まることを待つている。そして、

「行きますわよー！サモンー！」

清水の召喚獣が出現する。武装は短い剣とローマの兵士のような鎧である。

「一気に終わらせて差し上げますわー！」

清水の召喚獣が剣を振り、快の召喚獣に迫る。

「危ないっ！」

明久が叫ぶ。すると快は

「大丈夫。」

サツ、と必要最低限の動作でそれを避けさせる。そして回し蹴りを相手の横つ腹に当てる。ガン！と音が鳴る。しかし、

「こつこつこつ・・・・・・て～～～！」

苦悶の表情で転げまわっているのは清水の召喚獣ではなく快と快の召喚獣のほうである。鎧に蹴りを思い切り当たのだ。フィードバツクで足にものすごい激痛が走る。

「……ダメだな」「……ダメね」「ダメですね」と明久たちも微妙にあきれ顔である。

「ふふ、全くと言つていいくほどの素人ですわね！」剣を快の召喚獣に向かって突き刺そうとしてくる。それを横に転がることで何とか躱す。

「ほらほら！避けてるだけじゃ勝てませんことよー」清水の連撃を何とか躱し続ける。

「くそっ！何か手はないのか！？？？？」

ふと快は自分が何かを持っているのに気づき、見るとそれは、ディケイドライバーだった。

「なんで！？」

確かに快は昨日のようなことに備え、持つてきてはいたが、鞄の中に入れたはずであった。

「こんな時に、どう使えて、言つんだよ！」

召喚獣を動かしながら、快は考える。すると、ポウ、ヒティケイドライバーが淡く光り、快の頭にイメージを送った。

「・・・・なるほど、そういうことかー」

快は召喚獣を自分のそばに近づけさせた。

「どうしたんですの？降参するなら今のうちですよよ。」

余裕そうに清水が言つ。しかし、快も負けないくらいに余裕、ふりながら、

「へつ、それはこいつのセリフだぜ。」

と答える。

「虚勢を張るものもたいがいにしてください。これで……終わりです！」

清水の召喚獣が突進してくる。快はディケイドライバーに力を籠めた。するとディケイドライバーが快の手の中から消え、小さくなり

召喚獣の腰に巻かれた。

「行くぜ・・・変身！」

快が言うと、召喚獣は快のそれと同じようにライドブッカーからカードを取り出し、ドライバーに装填した。そしてドライバーを回転させた。

『カメンライド デイケイド!』

電子音が鳴り、召喚獣に灰色の装甲がつき、灰色からマゼンタカラーヘと色が変わる。召喚獣が小さなディケイドになつたのである。

「なるほど、道理で最初の姿が丸腰なわけだ。」

「快の召喚獣の姿が変わった！？」

「すごいです！そういう仕掛けだつたんですか！」

「変身とは、さすがに想像できなかつたのうー。」

「なんだか強そうだわ！」

「見たことがないタイプ・・・。」

明久たちが驚きの声をあげるなか、1人、清水は狼狽した。

「なっ、なんですかそれは！？」

「フツフツフツ、これはな・・・。」

と説明しようとしたが、なぜか、心のどこかで、自分がライダーであることを隠せ、と告げる声があつた。一瞬悩み、はぐらかすように、

「あー・・・企業秘密だ！！」

と言つた。そして、有無を言わせないよつて、カードを取り出し、ドライバーに装填させる。

『アタックライド スラッシュユー』

と電子音が鳴りライドブッカーをソードモードに変え、召喚獣を突進させる。

「クッ！」

清水は召喚獣に受け止めさせる構えをとらせた。しかし、剣同士がぶつかり、バキン！と大きな音が鳴ると、清水の召喚獣の短剣は根元からボツキリと折れていた。

「なつ・・・・！」

相手が動く前に快はライドブッカーを清水の召喚獣の首元に置かせ、宣言した。

「勝負ありだな。」

シユウウウンと音を立て召喚フィールドが消えていく。どうやら約束の12時を過ぎたようだ。あの後清水は「今日は、今度の対戦相手に挨拶をしに来ただけですの。先ほどは驚いて何もできませんでしたが、次戦うときは負けませんわ。」

といかにも負け惜しみ的なことを言って、体育館を後にした。

「しつかし、すごかつたな、快の召喚獣。まさかあんな仕掛けがあつたなんてな。」

帰り、快は雄一、明久と一緒に歩いていた。快はバイクもあつたが今はまだ使っていない。

「そうだね、すごかつたよ、一気に決着を着けてたもん。」

「ああ、まあ俺もある時初めて使つたんだけどな。まさかうまいくとは思わなかつた。」

快は得意げに話している。初めて見たときはすごく弱そうだった自分の召喚獣が本当はすごく強かつたことがうれしかつた。

3人はわいわいと話しながら学園を後にした。

その日の夜、誰もいない召喚獣制御システムマシン室、そこに、突如、召喚フィールドが出現する。誰もいなければこの場所で、なぜフィールドが出現したかは謎である。そのフィールドの中央にゆらゆらとホログラムのような蜃気楼のような、あるいは幻のようないの影があつた。その影は、小さくつぶやいた。

「・・・天野・・・快・・・・」

そして突然、フィールドはその影もろとも消えてしまった。そこには、稼働していない制御システムマシンが置いてあるだけであつた。

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・（後書き）

「こんにちはー作者です！

召喚獣が変身というとんでもない展開になりました！

これは、この作品を作る前から考えていたアイデアです。皆さん、いかがでしたでしょうか？

そして清水美春が登場です！これからも、どんどん準レギュラーキヤラを出して行きたいと思います！

余談ですが、冒頭のガンダムWのぐだりは後々ストーリーに関係していくのでお楽しみに！では、次回にお会いしましょう！

俺と気持ちと開戦と・・・

快の召喚獣が変身すると分かつた次の日の月曜日、今日からロクラスとの戦争が開始される。快は、学園までバイク、ディケイダーで向かった。途中、同じ文月学園の生徒が制服姿でバイクに乗っているのを見て、驚いている数人の学園生徒の姿を見た。学園より少し離れたところで、誰も見ていない事を確認し、ボタンに触れ、バイクを手のひらサイズにして、鞄に入れた。まだ、申請をしてないためあまり騒がれくなかったからである。

そして教室、そこではFクラスの全員と作戦会議を開いていた。「いいか、今日からロクラスとの戦争が開始される。俺がクラス代表で問題はないな。」

雄二が慣れた感じでそういうている。快は後ろのほうでそれを聞いていた。

(俺はうまくやれるだろつか・・・)

そう考えていると、

「快は、今回は初めての戦争だからな。自由に動いてくれて構わない。でも無理はするな。」

「あ、ああ、わかった。」

快のほうに視線が向く。快は、そう答え、説明の続きを促した。

「・・・ここは階段から・・・」

雄二是指揮官が似合つた、と快は思った。こういう大勢を動かす能力に長けている。そう思いながら、快は作戦会議を聞いていた。しばらくするとキーン、コーン、カーン、コーンとベルが鳴った。

「もうすぐ戦争が始まる。全員、死んでも勝て!。」

『オウ!』

作戦会議を切り上げ、全員の周りに緊張した空気が漂う。西村先生が入ってきた。

「もうじき戦争が開始される。そのことに関して一つ学園長から注

意事項がある。」

この大事な時間に、なんだろうか？全員がその言葉に耳を傾けた。
「全員、今回は勝つことしか考えていいないだろ。しかし、それではつまらないと学園長が提案を出しそれを自分の権限で通した。
「おい、鉄人、勿体ぶらずはつきり言えよ。」

雄一がそう言つと、

「西村先生と呼べ。そして今から言つから待て。えー、お前たちは、
今の教室の設備がもう下がらない。そう思つているだろ。しかし、
そうではない。学園長は新しいペナルティを用意した。」

「なんだと！？」

雄一が狼狽する。

「お前たちが、この戦争で負けたら、さらに設備がランクダウンす
る。それが今回のペナルティだ。」

『ナ・・・ナ・イイイイイ！？』

全員に動搖が走る。

「どういひことですか！？これ以上何が下がるつていうんですか！
？」

快も動搖を隠せず鉄人に詰め寄る。

「さあ、私にもそれはわからない。だが、何かしらがなくなるのだ
ろ。では、そういうことだ。全員これ以上設備が悪くならないよ
う頑張れよ。」

そう言つて、教室から出て行つてしまつた。

「畜生！ババアの奴、飛んでもねえこと言つだしやがつた！」

雄一が悪態をつく。そこに明久が

「どうするのさ雄一、負けたらこれよりひどくなっちゃうんだって。
」

とミカン箱を見ながら言つ。

「ああ、もう負けられねえぞ・・・。」

「これ以上ひどくなるなんていやだぜ・・・。」

「こよいよ、なにもなくなるんじゃねえか、こい・・・。」

皆も口々に、不安の声をあげる。

『・・・・・・・・・・』

教室が一気にシヨンとなる。すると

「・・・あ～～もうつ！～なに始まる前から負けるみたいな空氣出してんだよ！勝てばいいんだろ！！勝てば！！」

快が嫌な雰囲気を払拭するように立ち上がり、叫ぶ。

「俺は転校してきてまだ口が浅いからそんな大それたことは言えねえ！だがこれだけは言える！最初から士気が低くかつたら勝てるものも勝てねえ！勝ちたいんだろ！？だから、皆必死こいて勉強してきたんだろ！？」

快はそこで一度区切り、息を吸つた。

「皆、一人一人違う目的があつたとしても、勝ちたいのは同じだろ！？だつたら・・・！」

快がさうに言おうとするが、雄一がそれを制した。

「雄一・・・！」

「まったく・・・。転校生のくせに言つてくれるぜ・・・。」

そういう雄一の顔はどこか覚悟を決めたようだつた。

「どうしたお前ら！転校生にケツ叩かれねえと動けねえなんてそれでもいいのか！？」

雄一が全員に向かつて言つ。雄一も雄一なりに皆を鼓舞しようとしている。

『・・・・』

少しの沈黙が流れ、そして、

「へつ、そんなわけねえだろ！」

「ああ、そうだ！Dクラスになんか負けねえ！」

「さつやといんな汚い教室おさらばしようぜー！」

段々と声があがる。皆に士気が戻つていぐ。

「やつてやろうよ雄一！」

「Dクラスの連中に一泡吹かせてやる！」

『・・・・絶対勝つ・・・・』

「やるわよー！」

「私もがんばります！」

明久たちも完全に士気を取り戻し、やる気に満ちている。

「よし！俺たちならやれる！行くぞ！…」

『ウオオオ！…』

全員が団結し、士気が最高潮に達したとき、アナウンスが鳴った。

『それでは、只今よりFクラス対Dクラスの召喚獣戦争を始めます。』

短いアナウンスだったがそれ以上は語ることは無かつたようだつた。

「さあ、Fクラス魂を見せてやるぜ！」

須川が教室から意氣揚々と出ていく、皆も作戦会議で指示された場所へ向かう。

『じゃ、俺も行きますか・・・』

快が障子に手をかけると、

「ちょっと待て。』

雄一に引き留められた。

『なんだよ雄一。』

快が問うと、雄一は快の肩に手を置き言つた。

『快、さつきお前には自由に動いていいと言つたが、あれは嘘だ。』

『嘘？』

『ああ、お前にも役目がある。』

不敵に笑いながら言つ。

『とつておきの重要な役目がな。』

俺と気持ちと開戦と・・・、（後書き）

皆さん、こんにちはー夜ならじんばんはー！

いよいよ開戦です！今までなかなか戦争編に入れなくてすいませんでした！

これからもガンガン書いていくのでお楽しみに！

次回は快が戦場を駆け抜けます！

ご期待ください！

俺と初戦と戦略と・・・

快は教室を出て、手近に戦闘が行われている場所を探してゐる。現在、雄一に指示された作戦を決行中である。

「しかし・・・、上手くいくのか？」

快は雄一とのやり取りを思い出した。

「いいが、快、お前は今回の戦争の鍵を握つてゐる。お前にはプロパガンダ・・・、宣伝をしてもらおうと考えてこる。」

雄一が事前に考えていたであろう作戦を伝える。

「宣伝？」

「ああ、お前は転校してきてあまり日がない。おそらくお前の召喚獣は昨日の模擬戦で見せた変身能力がメインだと考えられる。おそらく清水もそのことは伝えてあるだろう。だが、そこを利用する。「どうするんだ？」

「おそらく清水の奴は転校生の召喚獣は変身する、とだけしか伝えられてないだろ？ それだけじゃ、それほどの脅威にはならない。だからわざとお前は派手に戦つてほしい。お前に派手に戦つてもらつていいだけに、こつちでハッタリをかます。」

「ハッタリってどんな？」

「俺たちは、切り札としてとんでもないものを持つてゐる。ただけDの連中に言つ。まあ、いきなり、やつらはお前の事だとは思わないだろ？ だが、そこでお前が派手に戦場を荒らせばそのハッタリは、本當になる。お前に連中の視線が行つてゐるしつて、俺たちがDクラス代表を叩く。まあ、言つてしまえば、囮作戦つことだな・・・やれるか？」

一通り説明が終わり、雄一が確認を取る。快は自信ありげに頷き、その場を立ち上がる。

「ああ、任せろ。一つ聞いておく、相手は全員倒していくんだな？」

「？ ああ、それに関しては構わないが、それがどうしたんだ？」

雄二が聞くと、

「いや、あんなことを言つた手前、俺も頑張らなきやと思つてな。」

快はそう答え、教室を出た。

そして現在、快は3人のDクラス生徒と鉢合戦をした。

「お前が転校生か！悪いが今回の戦争でお前の出番はなしだぜ！」

「ああ！Fクラスのバカなんぞには負けねえ！」

「ここで戦死してもらうぜ！北山先生！お願いします！」

1人が連れてきたであろう北山と呼ばれた若い先生に声をかける。

「はい、召喚を許可します。」

北山先生が言うとファイールドが展開される

「――サモン！――」

ボンツーと三体の召喚獣が幾何学的な紋様から出現する。

「サモン！――」

快も召喚獣を呼び出す。

『現国 Dクラス Fクラス

立場	陽一	118点	VS	天野	快	106点
下田	幸平	103点				
吉村	清	114点				

双方の点数が表示される。

「へっ、それなりに点数はあるみたいだが3対1だ！しかもお前の召喚獣は丸腰！勝ちはもつた！」

スポーツ刈りの男子、召喚獣の見た目から下田といつやつか、が剣を構えさせ攻撃を仕掛ける。

「どうかな・・・見せてやるぜ、俺の力！」

快が念じると召喚獣の腰にディケイドライバーが巻かれる。カードを取り出させ装填する。

「変身！」

快が言い、召喚獣がドライバーを回転させる。

『カメンライド ディケイド！』

電子音が鳴り、召喚獣の姿が変わる。

「なに！？」

サツ、と剣をいなし、敵の召喚獣の甲冑にパンチを入れる。バガーン！と大きな音が響く。見ると、敵の召喚獣の甲冑にひびが入っている。見ると表示された点数が変わっている。

『下田幸平 78点』

「「「何イ！？」」」

3人が動搖している。一発のパンチで点数が激減したのに驚いたのだろう。しかし快は攻撃の手を休めない。ライドブッカーをソードモードにし、一気に下田の召喚獣の懷まで間合いを詰める。

「ハアツ！」

気合の一言とともにライドブッカーを振る。ザンツー！という音と共に下田の召喚獣が袈裟切りにされ、また点数が変化する。

『下田幸平 46点』

「クッ、こいつ強いぞ・・・！」

下田が声を出す。

「オラオラどうした！そんなもんか？そこの2人もかかつて来いよ！まとめて相手してやる！」

「舐めるなあ！」

叫びながら立場が召喚獣に武装の拳銃を抜かせ、二丁拳銃で快に攻撃し、吉村の召喚獣が薙刀を構えながら突進する。

それを難なく躊躇した快は、新たなカードを取り出された。

「これでフェアに戦えるぜ！」

『アタツクリード イリュージョン！』

カードを使うと、快の召喚獣が三体に分身した。

「「「増えた！？」」」

「せりにこれだ！」

快は三体の召喚獣に別々のカードを取り出させる。

『カメンライド クウガ！』

『カメンライド 電王』

『カメンライド アギト！』

三体の快の召喚獣は姿を変え、下田の召喚獣にはクウガ、立場の召喚獣には電王、そして吉村の召喚獣にはアギトが向かい合つよう配置される。

「姿が変わった！？」

「おまけにもう一丁！」

快はさらにカードを取り出させた。

『フォームライド クウガ！タイタン！』

『フォームライド 電王！ガン！』

『フォームライド アギト！ストーム！』

快はクウガをタイタンフォーム、電王をガンフォーム、アギトをストームフォームにフォームチェンジさせた。

「さあ、ボッコボコにしてやるぜ！」

快の超ド派手囮大作戦（快の勝手な命名）がスタートする。

俺と初戦と戦略と・・・（後書き）

皆さん、こんばんはー！ 夜なら、こんばんはー！

快が召喚獣『ティケイド』を使いこなせて、いる感じに仕上げるために大量にカードを使わせてもらいました！ 意図としては、お互いが同じ武器で戦うように使うカードは選びました！ 次回はさらに戦争がらに展開してこきますー！ お楽しみに！

俺と囮と増殖と・・・、

「戦死者は補習！」

「ちくしょおおお！！！」

快に挑んだDクラスの3人は、いつの間にか近くにいた鉄人こと西村先生に連行されていった。

「ふう、ま、こんなもんかな。」

快の戦いは一方的だった。タイタンフォームの能力で下田の召喚獣の武装の剣を奪い、タイタンソードにし、驚いている隙に一気に難ぎ払い真っ二つにした。そしてガンフォームと立場の召喚獣の戦闘は敵の銃撃をダンスを踊るように躊躇し、至近距離で連射を浴びさせ蜂の巣にし、吉村との戦闘は、相手の召喚獣の薙刀をストームハルバートで細切れにして無防備になつたところを思い切り貫いた。そしてDクラス3人衆の持ち点が0になり、戦闘は終了した。

「さて、次の戦場に急がねえと・・・」

快が歩きだした瞬間

(・・・快・・・・)

と女の声が響いたような気がして後ろを振り返る。しかしそこには、西村先生に連行されていく下田、立場、吉村の姿しかなかつた。

「・・・まあ、いいか。」

快はその場を後にした。

「・・・、すげえ、やっぱり3人じゃダメか。」

快とDクラスの戦闘を影から見ている者がいた。清水に頼まれ、偵察として快の戦闘を観察していたDクラスの男子生徒である。

「こうしちゃいられない。すぐに戦力を増やさないと！」
彼はすぐに立ち去つた。

「・・・・・・」

しかし、彼の後ろにはもう一人彼を見ていた存在があつた。

「・・・坂本の言った通り・・・。」

快のクラスメイトであるムツツリーーこと土田康太である。彼は雄二に作戦会議が始まる前から指示を受けていた。快から目を離さないという指示である。雄一は快に偵察が付き、戦力が快に注がれることを見し、そのタイミングを見逃さないようにムツツリーーに報告させるように指示を出していた。

「・・・・・」

スーツとムツツリーーは雄一にこれを報せるべく、音もなくその場を後にした。

「・・・以上・・・」

「なるほど、思った通り快に戦力を向けたか。よし、俺たちは今からDクラス代表を叩きに行く。全員準備はいいな？」

雄一が報告を聞き、集まつた快以外のFクラスの面々に声をかける。「いいけど・・・雄一、快は大丈夫かな？」

明久が囮である快のことを案じ、雄一に話しかける。

「大丈夫だ明久、ムツツリーーからの報告では快は結構一方的な戦いをしたらしい。それに、まだまだ余裕そうだったと聞いてる。俺たちはあいつが作ってくれたこのチャンスに一気に勝負をつける。」「でも・・・」

「心配ないぞ明久よ、あやつなら心配ないじゃろう。」

明久に秀吉が声をかける。

「秀吉・・・」

「それにあやつはなかなかいい目をしつった。囮も上手くこなせているであろう。おかげでわしらはこうして無事集まれたんじゃ。」

「そうですよ明久君、天野君を信じましょう。」

姫路も秀吉の考えに賛同する。

「そつか、そうだね。よし！僕たちも頑張らなきゃ！..」

「その意気だ明久、よし、じゃあ行くぞ。」

Fクラスの面々は、打倒Dクラスという目的を胸に、代表がいるであらうDクラスの教室に向かった。

時同じくして、

「うわあ・・・」これはこれは・・・

快は廊下の一角から顔を出し、様子を伺っていた。そこにせざりと見積もつても15人はいるであろうDクラスの生徒が固まつて周囲を警戒していた。

「さて、どうしたものか・・・」

快が様子を伺つていると、

「しかし、すごいなFクラスの転校生は。」

「ああ、一気に下田と立場と吉村の3人を倒しちちまうなんてな。」

「でも、だからってこの人数は多すぎない? 清水さん。」

数人の男子と女子の会話が聞こえてきた。話の内容からどうやら清水もいるようだ。

「いえ、あの豚野郎は何か他のFクラスの連中とは違う感じがしてましたね。これでもまだ少ないと思いましてよ。」

「そうなの? 私はまだ見たことがないからよく分からぬわ。」

快は悩んだ。先ほどのようにイリュージョンのカードで人数を増やすことはできるが、あれは3体が限界であると快は理解していた。イリュージョンのカードで増やした分身は快の考えた通りに動く。だがそれは召喚獣の戦いで使うとなると相当な集中力が必要だつた。召喚獣のコントロールは召喚した本人が所有している。すなわち、1体の召喚獣のコントロールは難しくない、だが複数体のコントロールとなると途端に難易度が上がるということである。

(3人でやつとだつたんだ、15人なんてできるわけがない。仕方ない、こうなつたら・・・!)

快は意を決してDクラス軍団の前に躍り出る。

「!、あら、ごきげんよう豚野郎。さすがのあなたでも一気に15人は酷じやなくつて?」

清水が余裕そうな表情を浮かべる。

「まったく、過大評価してくれちゃつて・・・。ま、まだ俺を倒すには足りないかな。」

と快も負けじと余裕の表情を見せる。

「減らず口が言えるのもそこまでですわ！先生お願いします！」

「はあ、さすがこれは天野君には不利かもしけませんが、本人は平気そなので召喚を許可します。」

化学の布施先生が召喚を許可したことでフィールドが発生する。

『サモン！』

『サモン！』

ボウンツーと快の召喚獣の前におびただしい数の召喚獣が出現する。点数の表示法も変化していた。

『化学 Dクラス軍団 1608点

Fクラス 天野快 129点』

Dクラス側の点数表示が一人一人の点数から合計点に変化されている。

「さあ、叩きのめして差し上げますわ！」

清水の召喚獣が突進する。

「変身！」

『カメンライド ディケイド！』

快はすぐに召喚獣を変身させ、ライドブッカーソードモードで攻撃を受け止める。

「俺たちも・・・」

「いるんだから！」

男女の2人組が快の後ろに接近し、左右からレイピアとククリ刀で攻撃しようとする。

「危ねえ！」

サツとしゃがみながらそれを躊躇し、後ろへジャンプして距離を取る。しかし着地する場所にもう一人いることに気付かなかつた。

「掛かつたな、くらえ！」

ズバッ！召喚獣の背中をダガーのようなもので切り付けられ、快の背中にもフィードバックの痛みが、容赦なく襲い掛かる。

「ぐつ！」

攻撃を受けたことで、快の召喚獣は一瞬隙ができる。そこに、追い

打ちをかけるように拳闘士タイプの召喚獣の飛び蹴りが襲い掛かる。なんとか受け止め、後ろに後退するがまだ敵は多く、今度はナイフを、正確に快の召喚獣の目を狙つて投げつけてきた。

「当たるかよ！」

難なくそれを躱す。しかしナイフに目が行つてしまい接近するハンマーを持った召喚獣がいることに気付かなかつた。

「しま・・・つー！」

「遅い！」

ドゴン！とハンマーが快の召喚獣の体を打ち据える。

「・・・！」

痛みで息ができなくなる。装甲があつたとしても打撃系の強い一撃ならダメージが少なくとも衝撃には耐えられない。

「どうですか？ 少しあはれいたんじやありません」と、

清水が余裕の表情で快を見る。

「クツ・・・！」

何とか立ち直り、点数をチェックする。

『化学 天野快 76点』

確実に点数が減つている。このままではまずい、そう思い、何か対抗手段を考える。するとライドブッカーが勝手に開き、2枚のカードが飛び出す。

「・・・これは！」

「今更何をしようが無駄ですわ！」

清水が召喚獣を快の召喚獣に接近させる。

「これでどうだ！」

快はドライバーにカードを装填させる。

『カメンライド オーズ！』

快の召喚獣がディケイドの姿から人の欲と戦うライダー「仮面ライダーオーズ タトバコンボ」に姿を変える。

「なつ、姿が変わった・・・！」

「これも使うぜ！」

快はさらにもう一枚のカードドライバーに装填する。

『フォームライド オーズ！ ガタキリバ！』

オーズの姿が赤、黄色、緑のカラーリングから緑一色になり、頭部と腕部の形状も変化する。

「姿が変わったからなんですかー？ 何をしてこようがこの数なら押し切れますわ！」

清水の顔に少し焦りが見える。快が何か企んでいると察したのだろう。他のDクラスの生徒に一斉攻撃をするように指示を出している。「ああ、確かにその人数なら勝てるだろうな・・・、ただし！俺がもつと多人数になつたら話は変わってくるだろ！」

快はオーズガタキリバコンボの特殊能力を発動する。額の緑色の水晶のようなものが光ると2人に増え2人が4人に、4人が8人に、8人が16人にとどんどん数が増えていく。そして・・・、

「・・・これはすごい・・・。」

「う・・・嘘だろ・・・。」

「こんなのでたらめよ・・・。」

「勝てるわけがねえ・・・。」

驚いているDクラス軍団と布施先生の前には広大なフィールドを大量のディケイドオーズGKが立ちふさがっていた。だが、快は分身した召喚獣の制御は3人が限界のはずである。しかし、それはイリュージョンの場合であり、ガタキリバの分身は一体一体が自立行動をとることができ。よつて、イリュージョンのように集中する必要がなくなるということだ。しかも、召喚システムはこれを快一人の行動であるとし、すべての分身に快の残りの点数76点が与えられた。

「さあ、こつからが本番だぜ！」

快は召喚獣に攻撃の指示を出す。ドドドドドド！と大量のディケイドオーズGKが完全に人数差を逆転させたDクラス軍団に迫る。

「う、うろたえてはいけませんの！ 相手は所詮Fクラス！ どうせこれもハツタリですわ！」

清水が他のDクラスの生徒に声をかける。しかし、清水の発言はすぐには否定される。

「これで終わりだ！」

『ファイナルアタックライド オオオオーズ！』

カードを装填し、すべての召喚獣をバッタレッギングの能力で高くジャンプさせ、大量の飛び蹴りを浴びせる『ガタキリバキック』を発動する。

「うわあ！」

「きやあ！」

とDクラスから悲鳴があがる。強力なキックを浴びた召喚獣が爆発して消滅したのだ。そして、キックの雨が止むとフィールドに立っているのは快の召喚獣であるディケイドオーズGXだけであった。点数が表示される。

『化学 Dクラス軍団 0点

天野快

76点

』

決着がつき、布施先生がフィールドを消す。すると、

「戦死者は補習！」

とまた突然西村先生が現れ、清水たちを連行していった。

「クツ・・・、天野快・・・！ とんでもないやつですの・・・」

それ違いざまに清水がそう言つた。

「お褒めに預かり光栄だ。」

快も皮肉を言う。すると清水は不敵に笑い、

「ふふっ、まあいいですわ。我々Dクラスの勝利は確定しています。

』

「何・・・？」

「今頃、Dクラス代表の平賀源一^{ひらがげんじ}が他のFクラスたちをボコボコにしているでしょうね。『存じ？ 召喚獣戦争はどちらかの代表が負けるまで終わりません。反対に言えば代表が負ければ戦争は終わります。つまり、あなたがいくら強くても代表が負けてしまえば意味がありません。』

「要は、その平賀つてやつを倒せばいいんだな？」

快が聞くと、ズズン！とどこかで何かがぶつかったような大きな音が聞こえた。

「そういうえば、平賀源一は誰にも負けない力を手に入れた、と言つてましたわ。もつじき勝負もつくでしょう。」

清水は余裕そうに言ひ。

「雄一が負ける前に倒せばいいだけのことだ。」

快は言葉を返す。

「やれるもんならやつてみりですの。」

「やつてやんよ。」

快はそのまま言つと音がしたぼうに向かつた。

そして快がDクラス軍団に勝利する少し前、Dクラスの教室

「平賀、もうすぐFクラスがここに来るつてお前が言つてた時間だな。」

「ああ、もうすぐ、もつすぐだ……。これでやつらに復讐できる。・
・・！」

と何やら不穏な会話が行われていた。

「しかし、よくこんな作戦をとつたな。自分を倒しに来るであろうFクラスを転校生に向かわせたやつら以外をここに集めて迎撃する、こんな作戦、未来予知でもしないと使えないぞ。」

近くにいたDクラスの生徒がそう言つ。確かにそうだ。彼は、雄一たちの作戦をなぜか知つている。

「クク・・・、この力のおかげだ。この力で俺は無敵の力を手に入れた！ハハハハハハ！」

高笑いしている平賀を心配そうに見つめる英語教師の遠藤先生の姿があつた。

（彼つて、あんな感じだったかしら？普段はもつとおとなしい子なのに・・・。？何かしら、アレ？）

彼女の心配をよそに高笑いしている平賀の手にはUSBメモリーのようなものが握られていた。

俺と困と増殖と・・・（後書き）

皆さん、こんばんは！ 一晩ならんばんは！

なんと、今日は2か月前に感動の最終回を迎えた仮面ライダーオーズから、初コンボであるガタキリバコンボを登場させてみました！ 次回はDクラス戦争最終決戦スタートです！ お楽しみに！

俺とメモリと変貌と・・・

「音がしたのは確かにこの辺りだった気がするんだがな。」

快はきょろきょろと周りを見渡す。すると一つの教室の近くでフィールドが発生しており、その前で腕組みして立っている西村先生を見つける。何やら教室の中の様子を見ているようだ。

「西村先生」

快が声をかけるとチラ、と快の方を見てから突然、トン、と快のことを軽く突き放した。

「おっとうと・・・」

よろけながらその場から一步後ずさる。

「何するん・・・」

ですか、と言葉を続けようとしたがそれは果たせなかつた。突然、目の前のドアが吹っ飛び、大きな音を立てながら壁に何かが激突した。見るとそれは召喚獣である。装備は木刀と改造学ランという、何とも頼りない召喚獣だつた。

「！」

快はその召喚獣に見覚えがあつた。その召喚獣の召喚者は快がこの世界で初めて友達になつた人間、

「明久！」

そう、吉井明久である。快は慌てて教室の中に入る。するとそこには多くの召喚獣が展開し、いたる所で対決していた。見ると、雄二の召喚獣に3体の召喚獣が襲い掛かってきているところを発見した。

『代表が負ければ、戦争には負けるんですの。』

清水の言葉を思い出し、

「サモンツ！変身！」

快は雄二を守るうつと召喚獣を召喚し、変身させる。

『カメンライド ディケイド！』

マゼンタの装甲に身を包んだ快の召喚獣がライドブッカーソードモ

一ドで3体の召喚獣を切り付ける。

「快！来たのか！」

雄二が声をあげる。

「よそ見すんじゃねえ！」

さらに何か言おうとしたが、敵の邪魔が入り快と雄二は召喚獣を背中合わせにし、

「クッ、まずこの状況を切り抜けるぞ！」

全く同じことを言った。お互いの点数が表示される。

『英語 Dクラス 藤川啓祐 132点

Fクラス

坂本雄一 93点

中曾根大輔 119点 VS

香山晃 106点

天野快 121点

』

雄二の召喚獣は手負いらしく、点数が少ない。対してDクラスは全員が3桁以上の点数だった。快は、中曾根、香山の2人を、雄二は藤川の相手をしている。

「雄二、状況は！」

快は戦いながら雄二に戦況を聞く。

「俺としたことが、やつの・・・平賀の罠にはまっちゃった。Dクラスの連中はお前に仕向けたやつら以外の生徒をここに集めて、待ち伏せしてやがったんだ！」

メリケンサックで敵の双剣を受け止め、頭突きを食らわせながら雄二が答える。

「俺たちもお前以外の全員でここに来たから多少戦力はあつたんだが、向こうが強すぎる！いまは、俺明久、秀吉、島田、姫路しか残つてねえ！Dクラスの方は13人、こいつはちょっと不利だ！」

戦況を話し終え、雄二は藤川の召喚獣の腹部にパンチを入れ、吹っ飛ばす。

「なるほど！大体分かつた！」

快は新しいカードを取り出しながら答える。

『カメンライド ブレイド!』

「ハアッ！」

ブレイドに姿を変えた快の召喚獣はライドブツカーで中曾根の召喚獣を切り付け、後ろにいた香山の召喚獣を蹴り飛ばす。2体の召喚獣がよろけている隙に新しいカードを取り出し、高くジャンプする。

『ファイナルアタックライド ブブブブレイド!』

マッハ、サンダー、キックの3つの力を集中させて放つブレイドの必殺技、『ライトニングソニック』を2体同時にぶつけ、一気に点数を0点にさせる。そして雄一もメリケンサックの連撃で藤川を押し切り、何とか勝利した。

「これで後は10人！雄一は秀吉たちの援護に！俺は平賀をやる！」
「分かった、だが気をつける！何か今日の平賀は様子がおかしい！」

雄一が秀吉たちの援護に向かいながら快に忠告する。

「ああ、分かつてる！」

快は短く答え、Dクラス代表平賀と対峙した。

「快！」

先に戦っていたのであるう明久が快に声をかける。

「明久、さつき召喚獣が壁に叩き付けられていたが大丈夫か？お前の召喚獣は……！」

快が言うと

「大丈夫大丈夫！あんなの慣れてるから全然痛くないよ。」

明久は氣丈に答えた。

「お前が転校生とか言つやつか……まあ良い、2人まとめてかかってこい！」

平賀が言うと点数が表示される。

『英語 Fクラス 天野快 121点

V S

Dクラス代表 平

賀源一 137点

吉井明久 87点

』

明久の召喚獣は先程の攻撃で点数が少なくなっている。対する平賀の召喚獣はRPGに出てくる勇者のような武装で構えている。すると「吉井……お前は楽には殺さない……。たっぷりといたぶつてやる！」

平賀は制服のポケットからUSBメモリーのようなを取り出し、スイッチのような突起部分を押した。

「まさかそれは……！」

快はそれがなんなのかすぐに理解した。

『プロフェシー！』

メモリーから音声が鳴る。そしてそれを自分の召喚獣に投げた。すると平賀の召喚獣にメモリーが刺さり、勇者のような姿から何か別のものへと変貌していく。体は白を基本に、中央に紫色のラインが走り手にはバスターードから変形した白い大剣が握られていた。それは、召喚獣の本来の姿ではない。

「・・・・、ドーパント・・・！」

快が小さくつぶやくと完全に平賀の召喚獣はメモリー、ガイアメモリに飲み込まれ、仮面ライダーWの世界の怪人『ドーパント』に姿を変えた。

俺とメモリと変貌と・・・（後書き）

皆さん、こんばんはー！ 夜なら、こんばんは。

今度は召喚獣がドーパントになるという驚きの展開です！ 少々強引かもしませんが、これはこれで気に入っています。

次回は対プロフェシードーパント戦を書いていきますので、お楽しみに！

俺とメモリと怨恨と・・・

「快、何なのアレー？向こうの召喚獣が変になっちゃったよー。」

目の前で平賀の召喚獣が変貌し、困惑する明久が快に聞く。

「おいおい、まさかガイアメモリを使ってくるなんて・・・。」

快がそういうと、

「ガイアメモリ？何それ？」

明久がさらに聞き返した。

「ガイアメモリってのは・・・。」

快は説明しようとする。しかし、ビックリして？といつ疑惑が快の頭に浮かびあがつた。ここで、

「仮面ライダーWの世界ではびっくりしている、人を怪人にする道具だ。」

「なんて言つても、明久はちんぷんかんぱんだろ？。なのでこには、「あー、アレだ、ほら、えっと、召喚獣の能力を向上させる秘密のレアアイテムだ！」

とそれっぽい感じで答えておいた。

「ちょっと平賀君！召喚獣を改造したら反則ですよー。」

遠藤先生が平賀の行動を注意する。しかし、

「遠藤先生、これは反則ではありません。これは僕の召喚獣の能力ですよ。」

と言い返す平賀。さらに平賀は続ける。

「召喚獣はまだ未知の領域が多いんでしょ？だったらその未知の領域に入つたということなんですよこれは。」

とペラペラと話す。

「え、そ、そなんですか？・・・、分かりました。そういうことならこのまま続行してください。」

あっさり論破されてしまった遠藤先生は、注意を取り下げる。

「まあ、これで準備は整つた。覚悟しろ！吉井明久！」

「僕？！」

姿を変えた平賀の召喚獣、いやプロフェシーのメモリを使ったので「プロフェシードーパント」と言つべきか、が明久の召喚獣に突進する。

「まずい！」

快は明久の点数が残り少ないことを思い出し、召喚獣を動かして明久の召喚獣の前に出る。

「邪魔をするな！！」

しかし、プロフェシードーパントに裏拳を浴び、そのまま横に殴り飛ばされる。

「ウッ！」

召喚獣が顔面に裏拳を浴びたので、快の頬にも痛みが走る。そしてドーパントは明久の召喚獣の腹部を蹴り、そのまま吹き飛ばした。「ウグッ・・・」

明久も快同様、痛みのフィードバックにより、明久は腹に激痛を覚えた。この痛み方だともう〇点ではと思い、明久が確認する、しかし

『英語 吉井明久 75点』

まだまだ点数が残っていることに驚き、明久は
「すごい！僕の召喚獣って意外と頑丈？」

と自分が耐えたと思つていて。しかし快には分かつていた。

（いや、あいつ、まさか・・・）

「手加減しているんじゃないかな、そう思つていいんだろ？」
「！」

考へていることを平賀に読まれ、驚く快。

「言つたはずだ。たつぱりいたぶると…そう簡単に死なれては困る
！」

殴り、蹴り、切り付け、少しづつ、少しづつ明久の召喚獣を攻撃している平賀のプロフェシードーパントは、明久を倒すのではなく、明久本人をファードバックの痛みで痛めつけている。すると、

「明久君！」

向こうでの戦闘を終え、こちらに参戦してきた姫路の召喚獣が横から大剣で攻撃しようとする。だが、振り下ろされた大剣はプロフェシードーパントに片手で止められ、そのまま大剣ごと投げ飛ばされた。

『英語 姫路瑞希 208点』

姫路の点数が表示される。姫路と平賀の点数さはかなりあるが、それをものともせず姫路を片手であしらう強さを持っているのは、メモリの力であろう。平賀はさらに明久に攻撃しようとする。

「明久はやらせん！」

今度は秀吉が真正面から日本刀で切りかかった。ガキン！秀吉の召喚獣とプロフェシードーパントの刀と剣がぶつかる。ヒュッ！と秀吉が召喚獣に蹴りを入れさせる動作を見せる。だがそれはもう片方の腕で受け止められる。

「邪魔をするなと言つている！…」

ドゴッ！と逆に秀吉の召喚獣が強力な蹴りをくらつた。

『英語 木下秀吉 53点』

秀吉の点数がもうぎりぎりのところまで来ている。それを判断したのか、平賀は剣で秀吉に止めを刺す動作に入った。秀吉の召喚獣の顔面に剣が刺さろうとしている。

「やめろつ！！」

痛みでボロボロの明久の召喚獣が木刀でそれを受け止める。ボキッ！大きな音と共に木刀はへし折れてしまった。構わず平賀は明久と秀吉の召喚獣を串刺しにしようとしている。

『アタックライド ブラスト！』

後ろから快が攻撃する。しかし平賀のプロフェシードーパントは何も見ず避けた。だがそれは、明久と秀吉の召喚獣を雄一の召喚獣と島田の召喚獣が避けるのには十分な隙だった。

「大丈夫？アキ、木下？」

十分距離をとり、体勢を立て直す。

「ありがとう美波、雄一。助かったよ。」

「うむ、礼を言つぞ二人とも。」

明久と秀吉が島田と雄一に礼を言つている。秀吉はそうでもないが、明久は痛みのフイードバックで、かなり疲弊している。

「しかし、何なんだあいつは、なんでこうも明久を狙つているんだ？明久、何か心当たりは？」

「さあ、僕にもさっぱり分かんないんだよ。僕何したんだろう？」

雄一と明久が話しているとすると快が突然

「なあ、雄一、お前はさつき待ち伏せをされたと言つてたよな。」

と聞いた。

「ああ、そうだが、それがどうしたんだ？」

雄一が聞くと快は「ツ、と笑いこつした。

「やつの倒し方が分かつた。」

俺とメモリと怨恨と・・・（後書き）

皆さん、こんばんは。一晩ならじんばんは。

今回はドーパントとなつた召喚獣との戦闘を書きました。やつぱりバトルって書くのが難しいですね。

次回はロクラスとの戦争が決着します。お楽しみに！

俺と連携と決着と・・・、

「倒し方が分かつたつて本当?」

明久が快に聞く。快は自信満々で、

「ああ、これはおそらく間違いない。」

「うつ答えた。

「具体的にはどうするんだ?」

雄一が言つ。そして快は自分の考えを話した。

「作戦は・・・、」

「さ、作戦は・・・?」

「作戦は、あいつに自分たちの考えてこることをばらすことだ!」

『・・・・・・え?』

快の作戦を聞いた一同はポカーンとなる。

「えつと・・・、それはつまり・・・?」

「だから、あいつに全員が自分の考えてこることを伝えるんだよ。」

「だからどうことなのじゃ!-?」

秀吉がたまらず語氣を強める。

「いや、今は何も言わずに俺に従つてくれ。これで勝てるんだ。」
快が落ち着き払つた声で頼む。

「どうした? 作戦会議は終わつたか?」

快達に勝てると思っている平賀が離れたところから聞く。

「うるせー! もうちよつじだから待て!-」

快が平賀に向かつて言つ。

「いいか、ここでグダグダやつても始まらねえ。俺を信じてくれ

!」

「・・・、分かつた。だが失敗したら承知しねえぞ。」

「仕方ないのう。して、どうすればいいのじゃ?」

雄一と秀吉が言い、ほかのメンバーも快の作戦を聞き入れた。

「ありがとう、じゃあ、どうするか言つや。ここで重要なのは一つ

だけ、必ず全員で攻撃する」と。」「

「それだけか?」

「ああ、それだけだ。」

「よし、お前ら、今は全員の連携が必要だ。呼吸を合わせていけ。」

雄二が指示を出す。

「いや、呼吸を合わせる必要はない。全員自由に攻撃してくれ。」

快がそれを訂正する。

「どうしてだよ!?」

雄二が快に問う。

「やつてみれば分かるから!あと、考えを伝えるってのは例えば『俺はお前の腹部を攻撃するぞ。』、っていう考えを相手に伝えるようになに頭で考えるんだ。」

「なるほど。分かったよ。」

「じゃあ行くぞ!この戦争には絶対勝つんだ!」

ザツ!と快達Fクラスのメンバーは平賀の前に出た。

「ふん、ずいぶん長くかかったな。」

平賀が待ちわびたように言いつ。

「悪いな。お前を倒す方法を伝えるのに時間をくつた。」

快が言いつと、

「フツーやれるものならやつてみる!..」

と自分の召喚獣・・・プロフェショーダーパントを動かし、快達に接近してきた。

「行くぞ!全員、やつき言いつ通りにやるんだ!」

快が声をあげ、全召喚獣が動き始める。

「えつと、じうでしようか?」(まず、剣で横に薙ぎ払いますよ。)

「行け!」(横つ腹にメリケンでパンチを叩き込む!)

「じうじうとかの?」(日本刀で突きを打つのじや。)

「ひつかしら?」(後ろに回つて、サーベルで背中を突いてやるわ!)

「ハアツ!」(ライドブッカーで切ると見せかけて、蹴りを入れる

（！）

「あーそういうえば僕だけ丸腰だ！」（あーそういうえば僕だけ丸腰だ！）

全員が思考することを、平賀に伝えるようになります。すると、「ウツ！？」

一瞬ドーパントの動きが止まり、平賀が自分の頭を押さえる。動きが止まってしまい、全員の攻撃を、もうに食らった。

「よし！効いた！」

「これならいいけるぞ！」

全員がまた先ほどと同様に考えてることを伝えるようにしながら攻撃すると、また平賀が苦しそうに頭を押されて、召喚獣の動きが止まり攻撃を受けた。

「ウウツ、なんだこの頭痛は・・・？」

平賀が考えているうちに、快は止めに刺しに動いた。カードを取り出させ、装填させる。

『ファイナルアタックライド ディディディディケイド！』

快の召喚獣と平賀の召喚獣の間にカードが並び、快はその間を潜り抜けさせ、強烈なキックを放つた。

『ディメンションキック』を食らった平賀の召喚獣はそのまま点数が0になり、爆発して消滅した。

「そこまで！Dクラス代表平賀源一戦死！よつて今回の召喚獣戦争の勝者はFクラス！」

「やつた！勝った！僕たちの勝ちだ！」

明久が嬉しそうに言つ。

「やつたわ！これであのミカン箱ともおさらばできるわ！」

「はい！これで少しは勉強が楽になりますね。」

と姫路と島田も嬉しそうだ。

「・・・さて」

快は、召喚獣が0点になつたことで召喚獣から排出され粉々になつたメモリを拾う。

「これはどこで手に入れたんだ? 答えろ。」

快がすごみながら聞くと平賀は、

「え、えっと、その、あの、い、いきなり空から降ってきて、それから・・・」

となにやらおどおどとしていて先ほどとはまるで別人のようだった。「なあ、快、どうしてやつに勝つ方法が分かったんだ?」

雄二が聞いた。

「ん、簡単なことだ。雄一、『プロフェシー』の意味は?」

「・・・たしか予言だつたか?」

「そう、予言だ。あいつが作戦を先読みして待ち伏せしたのも、攻撃を見ずに避けたのも、すべては予言があつたからだ。」「どういふことだ?」

「あいつは、俺たちが動く前に予言を受け、行動を先読みしていたんだ。だから俺の銃撃も振り返らないで避けた。だから俺は考えた。もし、あの予言の力が一度に多くのことを予言したらどうなるかつてな。案の定、一度に多くの予言を聞いて、動きが鈍くなってくれて助かっただぜ。」

「なるほど。じゃあ、その予言の力を与えたのも、召喚獣が変わったのも・・・」

「そう、こいつの仕業。」

快はメモリの破片を見せる。

「なんなんだこれは? USBメモリーのようだが。」

「まあ、壊れちまつたからにはどうしようねえな。」

2人が話していると、

「おーい、雄二、快、そろそろ行くよ。」

と明久に呼ばれた。

「まあでも、今はこの戦争に勝つことを喜ぼうぜ。」

「ああ、そうだな。」

快と雄二は、Dクラスの教室を出よつとした。そこでピタ、と快が歩みを止める。

「そりいえば、なんでお前は明久を恨んでたんだ？」

平賀の方を振り向き、問いかける。

「えっと、実は・・・、僕が生まれてはじめた買つた、その、本を彼に取られちゃって・・・、

それで、僕、怒つて彼を恨んだんだ。」

「明久がそんなひでえことするわけないだろ。」

雄二が言う。確かにそうだ。明久が他人の本を取るとは思えない。「いや、それが買ったまでは良いんだけど、そのあと段々、恥ずかしくなっちゃって、隠してたんだ。それで取りに戻つたら、吉井君が僕の本を持つていくのを見ちゃつたんだ。」

「そこで引き留めればよかつただろ。」

「いやあ、僕、そういうのけょつと苦手で・・・。」

「事情は分かった。俺が言つて、明久に返すよつて説得する。平賀、本の題名を教えてくれ。」

快が平賀に本のタイトルを聞いた。すると、

「え！？いや、そんな、こんな学校の中でそんなこと・・・。」

となにやらモジモジと言つのを躊躇つている。

「大丈夫だから、笑つたりしねえよ。」

快は優しく言つた。すると、納得したのか、教えてくれた。

「えつと、確か『Hなお姉さんがピー！してズギューン！してあげ・る』だったかな、つてあれ？」

快はもうそこにはいなかつた。そして遠くの方で、

『明久アアアアアアアアアアアア！』

『え！？ちょ！？なになになになにな！？』

『H口本だつたんかいイイイイイイイイイイ！』 ドガシャアツ！

『ぎやああああああああああああああ！？』

と怒号と悲鳴が聞こえた。

「やれやれ・・・」

雄二は肩をすくめながらDクラスの教室から出るのであつた。

俺と連携と決着と・・・（後書き）

皆さん、こんばんは！ 一晩ならじんばんは。

戦争終結です！ バトルを書いていくのはとても難しいところですが骨身にしましたホント大変だったー！

さて次回は戦争の後に起る不思議な事件がテーマです。オリジナルキャラが登場します！ ご期待ください！

感想お待ちしております！

俺と規制と代用と・・・、

Dクラスとの戦争が終わり、次の日の朝である。結局あの後、明久は平賀に工口本を返した。明久は、『あれば取つたんじゃないよ！学校の裏庭の掃除をやつてる時に妙に木の根っこが盛り上がりつてから少し掘つてみたらあれが出てきたんだって！』

と必死に弁解していたが、なにはともあれ、平賀は本が無事戻ってきたので明久のことを許した。だが快はそんなことよりもっと気になることがあった。

（ガイアメモリ・・・あれもやつぱり亀裂から流れてきたのか？）そう、あの時平賀が使つたガイアメモリの事である。快はマンティスワームの時と同様に世界と世界の間に生じた亀裂からこの世界に流れてきたのではないかと考えていた。

（前回は一つだけだつたが、もし、何個も流れてきたら対処できるだろうか？）

そんなことを考えながら歩いていると、

「快一、おはよー」

と明久が走ってきた。

「おう明久」

快も挨拶を返す。

「いやあ、昨日は大変だつたね。」

明久が昨日の戦争の事を話している。

「ああ、全くだ。初めての戦争で一気に15人も相手をすることになつたり、代表の平賀の召喚獣が、いきなり化け物みたいになつたりしてな。」

快も昨日の戦争を振り返る。

「だが、今度の相手はもつと手強いぞ。」

「後ろから声がした。振り返るとそこには雄一がいた。
「雄一か、・・・その隣にいるのは？」

快が雄一に聞く。雄一の横にはきれいな長い黒髪の文月学園の制服を着た女子がいた。

「ん、ああ、こいつか。こいつは霧島翔子、2年Aクラスに所属していて、俺のことをする。ああ、いやなんでもねえ。翔子、こいつがさつき話した転校生の天野快だ。」

「よろしく……。」

と霧島と呼ばれた女子は、短く快に挨拶する。
「ああ、よろしく。そういうえば雄一、さつき戻つてた今度の相手ってどうこいつことだ?」

快が霧島に挨拶してから雄一に聞いた。

「もしかして雄一、ホントにやるの?」

明久が確認をとるように聞く。

「当然だ。取り下げるつもりはない。」

雄一がきつぱりと言い切る。

「やるつて何をだ?」

快が聞くと雄一が答えた。

「今度また俺たちは戦争をする。相手は……」

「私たち……。」

雄一の答えに霧島が割つて入つた。

「え・・・、つてことは何か? Aクラスと戦争するのか? その、学年で一番頭がいい奴らと。」

快が言うと、雄一の代わりに明久が答えた。

「雄一が前から考えてたんだけど、Dクラスとの戦争に勝つたらFクラスは今度はAクラスと戦争して一気に下剋上しちゃおうってことなんだ。」

「いくらなんでもそりや無茶じやないか?」

快が言うと雄一が、

「何言つてんだ。今だからこそだ。いいか、俺たちはDとの戦争に勝利した、この流れに乗つかつて、このままAを倒しちまおうと考えてたんだ。まあもつともAとの戦争に負けたとしても、また設備

が元に戻るだけだからな。」

と本当に前々から考えていたのであるひつ考え方を話す。そのまま校舎に入り、下駄箱がある場所で霧島とは教室が別の方向なので別れた。
「じゃあ、そういうわけだ。翔子、後で宣戦布告に行く。首洗つて待つてろ、つて代表に伝えとけ。」

「分かった・・・その代りFクラスが負けたら、雄二・・・、「ああ、分かつてる。」

と雄一と霧島は別れ際に何か話していたので、何を話していたのか聞こうとしたら、目の前に西村先生が現れた。

「天野、学園長がお前に話があるそうだ。今から学園長室に行け。」

そう快に告げた。

「おい快、お前何やったんだ？転校してきてすぐにババアに呼び出されるなんて。」

雄二が言つた。しかし快にも自分が何をしたのかいまいち心当たりがなかつた。

「さあ？俺にも分からん。」

快はそう言つて学園長室に向かつた。

「失礼します。」

快は学園長室の豪奢な扉をノックして開いた。そこには学園長が大きな椅子に座つて待つていた。

「なんですか？話つて。」

快が聞くと、学園長が答えた。

「お前さんを呼んだのは他でもない、ちょっとお前さんの召喚獣について聞きたいことがあってね。」

ピク、と一瞬快は眉を動かす。バレたか？と思い、少し焦る。

「俺の召喚獣が何か？」

快は気付かれないように平静を装いながら聞いた。

「お前さんの召喚獣、召喚したときは丸腰なのになぜ姿が変わるんだい？昨日はカメラ越しに見せてもらつたよ。あれには驚いた。特にお前さんの召喚獣が大量に増えたときなんかはね。」

「それで？何が聞きたいんですか？」

快がさらに聞くと、学園長は手元のパソコンを操作し、ある画面を快に見せた。そこには見知った顔が沢山並べられていた。

「昨日、お前さんが倒したロクラスの生徒だよ。ここからは全員戦争の後妙なことが起こっている。」

「妙な事？」

「召喚獣のデータがきれいじゃなくなってるんだよ。何の痕跡もなくきれいにね。」

「と言うと？」

「調べた結果、ここからの召喚獣の最後の戦歴はみんなお前さんと戦つた時で止まってる。」

「・・・」

「しかも、その敗北の仕方がおかしい。普通、召喚獣は0点になれば自動的に消えるんだがこの召喚獣たちは見ると爆発して消滅している。」

確かに、キック技で止めを刺した者たちは爆発していた。

「私の見解としては、お前さんの召喚獣には召喚獣を消滅させる何らかの能力があるんだろう。だからこいつとしては、いちいち召喚獣を作り直すのは面倒だ。だからあまりこの力は使わないでくれ。」

「ちょっと待つてください！-! そしたら俺はさっそく戦えばいいんですか！？」

たまらず快が学園長に詰め寄る。すると学園長は、

「その点に関しては心配ないよ。中学校で技術を担当している竹崎先生が、召喚獣に武装を装着させる方法を研究していくね。こっちで話はつけてあるから放課後に技術室に向かいな。」

「召喚獣に武装？」

快はうまく想像できなかつた。召喚獣が武装するところとは、さらに強化されるということなのだろうか？と考えていると、

「ほら、話は済んだよ。とつとと教室に戻んな。」

と学園長が快に部屋から出るよつに言つた。快は学園長室から出るとそのまま「クラスの教室へと歩いた。

「・・・ってなことがあつたんだよ。」

快はいつもメンバーに学園長とのやり取りを話した。

「なるほどな、いかにもババアらしいな。」

「召喚獣のデータを消すなんてすごいね。」

「天野君の召喚獣が新しくなるつてことですか?」

「しかし、変わつたとして一体どう変わるのかの。」

「・・・開けてみてからのお楽しみ・・・。」

「やっぱり最初のより強くなるのかしら?」

皆、それぞれ思い思いの言葉を発する。

「ああ~どうなることやら・・・」

そういふしている間に時間が過ぎ西村先生が「エエ」とやつてきた。

「えー、では朝のホームルームを始める。」

この日の放課後、学園では不思議なことが一つ起る事となるが、誰もそのことを知る由もない。

俺と規制と代用と・・・、（後書き）

皆さん、んにちはー夜ならんばんは。
快がディケイドの力を封じられましたー！（おひおひ）
次回はこの日の放課後、快が技術の竹崎先生の所へ行くところから
入ります。
お楽しみに！

俺と方便と同好の士と・・・、

「うーん、やっと終わったあー・・・・」

快は一日の全ての授業が終わり、大きく伸びをした。今日はバイク投稿申請書を提出した以外に特に変わったことは無かつた。そこで快はあることに気付く。

「おい雄一」、結局なんで今日は宣戦布告に行かなかつたんだ？」
そう、今朝言つていたAクラスへの宣戦布告を雄一は行つていなかつた。

「ん、ああ、それがな、お前がババアに呼び出されてた時に翔子からメールが来てな、今日は向こうの代表が不在らしい。」「なんでだ？」

「風邪じや。姉上は昨日風呂上りに大好物の・・・いやいや、本を読んでいてそのまま湯冷めして風邪をひいてしまつたんじや。」
雄一の代わりに秀吉が答える。

「・・・姉上？」

快は秀吉の言葉を繰り返す。

「ああ、言つてなかつたのう。わしの姉上、木下優子きのこだゆうこはAクラスの代表をしておるんじや。」

「へえ、秀吉つて姉ちゃんいたんだな。」

「まあの。幸い酷くはならなかつたんじやが大事をとつて今日は休むことにしたようじやつただ。」

「そういうことか。ま、布告は明日にでもするわ。」「

「どうか。」

「すまぬの、雄一。」

快が雄一とのやり取りを終え、立ち上がる。

「さてと、じゃあ、行きますか・・・。」

快は今朝言われた通り技術室に向かうべく、歩き出す。

スース、パターンと快が教室を出ると、雄一が明久と話をしていた。

「そういえば、快は召喚獣の改造に行くんだつたな。」

「改造ということではないと思うけどそうだね。」

「・・・匂うな。」

「え?」

「仮にババアの言つた通り、快は召喚獣が召喚獣を消す能力があつたとして、それは召喚システムが決めたことで、ババアが後からどうこうできる問題じやないと思うんだがな。」

「たしかにそうだね。あれ?じゃあなんで快は呼ばれたんだろう?」

「そこが分からんの。・・・、ババアが何か企んでるとか思えないと。」

そんな会話があつたとは全く氣付かず、快は地図を頼りに技術室に向かい、今、その技術室の扉の前に立つてゐる。

「失礼します。」

快は扉を開けた。中には大きな机が6つ置かれ、壁の周りには工具やら材木やらがきれいに並べられており、その机の1つに作業服を着た中肉中背の男性が座つていた。

「あの、竹崎先生?」

快は声をかける。

「・・・・・」

しかし、先生は全く微動だにしない。何をしているのかと思い近づくと、どうやらイヤホンをしているようだつた。イヤホン越しからは『二人のこの手が真つ赤に燃える!..幸せ掴めと轟き叫ぶ!..ばあああくねつ!..ゴッドフィンガー!..石!..破!..ラアブラブ!..天驚けええええん!..』

と言う声が聞こえ、前に置かれているパソコンではゴッドガンダムがテビルガンダムに止めを刺すあのシーンが流れていった。

「・・・やつぱこの展開1回目はそうでもないけど落ち着いて見るとものすごい突つ込みどころ満載なんだよなあ・・・石破ラブラブ天驚拳つて・・・。」

と何やらぶつぶつと独り言を言つてゐる。快はトントンと先生の肩

を叩いた。

「うわ！びっくりした！」

バツッと快に振り向き、イヤホンを外す。

「なにやつてんですか・・・」

快は呆れながら言つ。

「あ、ああ！たしか君が学園長から言られた転校生の天野君だね。」

「はい、今日はよろしくお願ひします。」

快は挨拶するが内心は

（生徒待つてる間にGガンダムの最終回見るなよ・・・）

とこう竹崎先生への不満があつた。

「さあ、立ち話もあれだから座つて座つて。」

と快に向かいに座るよう促す。

「あ、じゃあ失礼します。」

快は言われた通り、椅子に座つた。

「えーと、何だっけ要件？」

いきなり快は椅子からズルッ！とずつこけた。何を話すのかと思つたら要件を教えてくれつて一体どうこう神経してるんだと思いつながら椅子に座りなおす。

「さつき自分で学園長から話は聞いてるって言つてたでしょ？が！」

「え、ああ！はいはい、思い出した思い出した。召喚獣の装甲装着テストの事だね。」

先生は思い出したように言つた。

「・・・え？」

「ん？」

快はポカンとなる。何言つてんだこの人は？と思い、先生に聞いた。

「あの、テストってどーゆーことでしょうか・・・？」

何やら面倒なことが起こりそうだ。

「嘘？」

明久が素つ頓狂な声をあげる。ここは学園長室。明久と雄二が学園

長に事の真意を確かめに来たのである。

「そうだよ。あれはあいつをテストに使用するための方便。本当は別に変身能力も使ってくれて構わないんだけどね。まあ、おかげで何も疑うことなく行ってくれたんだけどね。」

「とも悪びれるそぶりを見せず学園長が答える。

「つまり、快は実験に利用されるためにわざわざ技術室に向かつたつてことか。」

雄一が言う。

「ちょっと待つてください、がくえ・・・ババア！どうして快がそんな実験をやらされてるんですか？理由を教えてください！」

「学園長と呼べと何回言わせるんだい全く・・・まあ理由は教えてやらないこともない。あいつには適性があつたんだよ。」

「適性？どういうことだ、がくえ・・・ババア。」

「絶対あんた達わざとやつてるね・・・。『ホン、あの天野の召喚獣を詳しく調べたら、以前スタートした召喚獣の追加装甲計画で開発された装甲と適性があることが分かつたんだよ。』

「追加装甲計画？」

雄一がオウム返しをする。

「この計画は、その気になれば順位が低いクラスでも簡単に校内のパワーバランスを変えられるように一人の教員が考えた計画だよ。その追加装甲を使えば、中学1年のFクラスの一番バカな生徒が高校3年のAクラスにも勝てるかもしぬくなるっていう事らしいが1つ欠点がある。」

「欠点？」

今度は明久が返す。

「それは・・・？」

「それは・・・？」

「誰も動かせないってことだね。」

「コオツ！！と明久と雄一は漫画で見るようなずつこけ方をした。

「・・・それじゃ意味がないだろ・・・！」

「まあ、適性があれば動かせるって話なんだよね。だから最近召喚獣の検査を行つたんだよ。あれは完成した追加装甲を動かせるやつがいかないかと思つて実施したんだ。」

「それで快がヒットした……ってことだな？」

「そういうことだよ。今頃はもう始めてるんじゃないかい？」

「どうしてわざわざそんな回りくどい方法を……。普通に頼めばよかつたじゃないですか。」

明久が聞くと、

「まあ、自分からFクラスを志願するようなやつだからねえ。何企んでるかわからないじゃないか。」

いたずらっぽく笑つてみせる学園長であった。

『お前の方が何か企んでるだろ……。』

2人の考えが一致する明久と雄一であった。

「……というわけだよ。」

「コッとも笑つて説明を終えた竹崎先生の前には椅子に座り額をおさえる快の姿があった。

「つてことはアレですか？俺はドッキリ仕掛けられた拳銃、テストの実験台にさせられるつてことですか？」

「んー、そうだね。」

快は心の中で固く誓つた。

(今度からババアって呼ぼう！――)

「さて、天野君！君に聞きたいことがある。」

「・・・なんですか？」

「ガンダムは好きかい？」

意外なことを聞かれた。何かもつと別の事を聞こうとしていると思ったのだが全くそうではなかつた。

「え？まあ、はい。」

「本当にかい！？」

「ずっと快に顔を近づけてきた。

「は、はい。」

「ファーストは見たー!？」

「はい・・・。」

「Nはー!?」

「はい。」

「NNはー!?」

「はいー!」

ものす”ぐ食いついてくるので快も楽しくなり自然と声が大きくなる。

「好きなガンダムはー!?」

「ええっと・・・、ワイングゼロですー!」

「どつちのー!?」

「H、エンドレスワルツの方です!」

ガシッと肩を掴まれた。

「き・・・君は、君といつやつはビームでタイミングがいいんだ!」「はい?」

快がそう言つと竹崎先生が立ち上がり、部屋の奥に来るよう促した。そこには扉があり扉の向こうの、その部屋は薄暗く、部屋の中では大きなパソコンが稼働していた。

「ワイングゼロの設定は知つているかい?」

竹崎先生がパソコンを操作しながら快に聞く。

「えつと、確か最初にして最強のプロトタイプMを造したつけ?」
快がそう答える。

「正解。この召喚獣追加装甲計画のコンセプトはまず、ひとつプロトタイプを作りそのデータを取つて、そこから派生して様々な装甲を作つていこうってわけなんだ。」

カタカタと、パソコンに目を向けながら言つ。

「・・・、そういうえばこの計画つて先生が作ったんですか?どうしてこんな計画を?」

快が聞くと、パソコンから目をそらさずこう答えた。

「んー、見たかったから・・・、でいいかな?」

「見たかった？」

「うん、召喚獣を使った戦争って言ひけど、やつぱり僕としてはガンドム系の装備がもしあつたら、そういう武装がいかに能力を發揮するのか見たかったんだ……。でも残念ながらそんな武装を持った人は出てこなかつた。」

「……だからいなゐのならば作つてしまおつと？」

「そ、この計画も学園長は快く了承してくれたよ。戦争に新しい空気を取り入れようじゃないかつてね。おかげでプロトタイプ完成までこぎつけたよ。で、お話はここまで。じゃあ召喚フィールドを出すから召喚獣を呼び出して。科目は総合点だよ。」

「あ、分かりました。サモン！」

ポンツと幾何学的な紋様からおなじみの丸腰制服召喚獣が現れる。

『総合 Fクラス 天野快 327点』

と点数が表示される。Dとの戦争を終えたすぐなので点数は少し低い。

「うん、見事なままで丸腰だね。」

「うつ・・・・」

さらつと氣にしていたことを言われた。

「じゃあ、追加装甲装着テストを開始するよ。『アームド』の掛け声で召喚獣に装甲を着けて。」

「こうですか？ アームド！」

快が掛け声を出す、すると快の召喚獣の服装が制服から何かインナードパンツのような服装になつた。そしてその周りに光の渦が発生し、足から装甲が纏われていく。白を基調にした下半身の装甲に、青を基調とした上半身の装甲が着き、美しい白い4枚の翼が背中から伸びた。手には2丁の長銃身ライフルを持ち、その姿はまるで・・・

「ウイングゼロじゃないですか・・・」れ。

快は薄々感じていた予感が的中した。

「そう！これが召喚獣追加装甲計画第1号ウイングゼロ……武装は

ツインバスター・ライフルと肩のマシンキャノン、ビームサーベルだけだけどその運動性能は他の追随を許さない！なんと飛行もできちゃう！

「もうウイングゼロって名前も付けちゃうんですね・・・」
熱く語つている先生にツッコミを入れる。

「よし！起動は上手くいった。次は武器のテストだ。ちょっとこの的をそのバスター・ライフルで打つてみてくれ。」

言つて快の前に召喚獣サイズの的が置かれる。

「えっと、アニメみたいにやると、こうかな・・・」

快は召喚獣にバスター・ライフルを2丁から1丁に接続させる。そして、引き金を引いた。

「・・・つ！！」

ドゴオオツ！とものすごい勢いのエネルギーの奔流が飛び出し、快の腕には重たい衝撃が走る。

「・・・すごい・・・予想以上だ・・・！」

竹崎先生も息を飲む。的には跡形もなく消滅した。

『総合 Fクラス 天野快 297点』

点数が減つている。

「あれ、先生点数が減つてるんですけど

「ああ、言つてなかつたね。この追加装甲の原動力は点数だよ、武器を使うと点数が減少する。ウイングゼロの場合は空を飛ぶのも点数がいるよ。そうしないとフェアじゃないからね。」
先生が説明する。
「そうですか・・・」
「じゃあ、次はビームサーベルの出力調整を・・・」
と快は様々なテストをこなし、日もだいぶ傾いたころにテストはすべて終わった。

「いやあ、本当にありがとう！おかげで今日は良いデータが取れたよ。」

夕日をバックに竹崎先生が快にお礼を言う。

「いえいえ、どういたしまして」

快も正直楽しかったので笑顔で言葉を返す。

「ああ、日もだいぶ落ちちゃったね。今日はもう帰りなさい。」

「え、でもウイングゼロはどうするんですか?」

「それは君にあげよう。何せそれは君にしか動かせないんだ。」

「良いんですか!?」

「ああ、いいとも。ただし!」

と先生は付け足した。

「今度の戦争ではそれを使つてくれ。相手はAクラスなんだろ?」

「コトと笑いながら先生は言った。

「え、なんで今度はAクラスと戦うって知つてるんですか?」

快にはそれが分からなかつた。

「そりや、職員室では噂になつてゐるよ。AクラスがFクラスに宣戦

布告するつて。」

快は驚きを隠せなかつた。

俺と方便と向好の十と・・・、（後書き）

皆さん、こんばんは！ 一晩ならじんばんは。

長文すいませんでした！ なんだかどこで区切つたらいいのか分からず、結局、全部入れちゃいました！ ホントにすいません！

さて、装甲として登場したウイングガンダムゼロ（EW版）ですが、こいつは今度の戦争で大変重要な位置になります。次回は快の帰宅途中に起こったもう一つの不思議な出来事を書いていきます。お楽しみに！ 今度は長文になります！

俺と出会いと陰謀と・・・

快は技術室を出て、下駄箱に歩いていた。時刻は午後5時15分である。日も沈みかけ西日が眩しい。

「・・・あ・・・」

快は下駄箱から自分の靴を取り出した瞬間気付く。

「教科書、教室に忘れた。」

快が忘れた教科書は今日出された宿題を解くのに必要なものである。このまま帰つたりなんかして宿題をやらなかつたら雄一曰く『宿題が3倍になる』らしい。

「しようがないか・・・」

快はつぶやき、教室に向かつた。

「しかし、Aクラスがこっちに宣戦布告しようとしてるなんて全然想像できなかつたぜ。」

独り言を言いながら誰もいない廊下を歩く。

「着いた着いた。」

ガラツつと障子を開ける。するとそこには女子がいた。窓を開け、沈んでいく夕日眺めている。だが快はその女子はFクラスではないと分かつた。Fクラスには女子は姫路、島田の2人しかいなはずだからである。（秀吉はカウントしない。怒られるから。）

「おい・・・」

恐る恐る声をかけると、彼女はこうつぶやいた。

「私は私が誰だかわからないのに、世界は回つてる。」

「え・・・？」

「突然目の前に世界が広がつて、今ここに立つてる。」

ヒュウと風が窓から入つてきて、彼女の秀吉より長いが霧島より短いきれいな髪をなびかせる。

「・・・・・・。」

快は思わず息を飲んだ。

(きれいだ・・・)

そんなありきたりな感想しかなかつたが、それ以外に表す言葉を見つけられなかつた。

(いかんいかん、何を考えているんだ俺!)

振り切るよう自分ミカン箱の中から教科書を取り出す。

「ねえ、あなたは自分が誰だかわかる?」

唐突に声をかけられ、え、と振り返ろうとした。すると背中に優しく抱きついてきた。

「あなたは・・・わかる?」

抱きついてきた彼女の体が小刻みに震えている。泣いている。すぐにそう分かつた。

「・・・わからない。突然この世界に落っこちてきて、自分の記憶もないのに、お前は世界を破壊する者だとと言われ、今ここにいるんだ。」

見ず知らずの、初対面の人に、ここまで喋ってしまった。なんだか自分に似ていると思ったのだ。

「私には、帰る場所も、帰りを待つてくれる人もいないの・・・」

「お前、名前は?」

気が付けば快は彼女に名前を聞いてしまつていた。

「・・・ユキ・・・苗字は・・・知らない・・・」

彼女、ユキはそう答えた。

「ユキか。俺は天野、天野快だ。」

「快・・・・覚えた。」

快が振り向くと、二「と優しく微笑む女の子がいた。

(やばい、どうしようもなく・・・可愛い)

快は一瞬心臓が止まるような感覚を覚えた。スッとユキが快から一步離れた。

「私、行かなきや。私には何かやらなきやいけないことがあつた気がする。」

「え・・・」

快が何か言いかけたが、ユキはそのまま障子に手をかけた。

「じゃあね、快。また会えそうな気がする。」

ユキが出ていき、自分だけになつた教室で快はしばらく動くことができなかつた。空には今にも沈みそうな夕日が赤く輝いていた。

「・・・博士、DB-Yがターゲットに接触を果たした模様です。」
とある場所、とある時間に大きな画面に映る科学者のような風貌の男が、博士と呼ばれた白髪の老人に報告をしていた。

「そうか、途中トラブルが発生したが、転送は成功したようだな。博士と呼ばれた老人はニヤリと口元を歪ませる。

「はい、じきにあの力が發揮されるでしょう。」

「ククク、あの力をもつてすればやつもただでは済みまい・・・」

「いよいよですね博士。」

博士の後ろには、マントとローブで体全体を覆つている長身の若い男が立つている。

「ああ、これで我々の宿願は果たされる。フ、フフ、ハハハハハハハハハ！」
博士は辺りに響き渡る大きな声で笑つた。

「・・・楽しみにしてますよ、ネオ死神博士。」

マントの男の口元が怪しく歪む。

「待つていろ、ディケイドオオオオオオオオ！――」

ネオ死神博士の叫びは、地底を恐怖で震わせた。

俺と出会いと陰謀と・・・（後書き）

皆さん、こんにちはー。夜ならじんばんはえー、前回が大変長文だったため、前回よりも短く仕上げました。新キャラが続々です！ユキと名乗る少女、ネオ死神博士、謎の男など考えるのはとても大変でした！

次回は快がFクラスと対決？をします。そう幸せをこよなく嫌う奴らとの死闘が、幕を開けるのです。

次回もお楽しみに！感想待つてます！

俺と彼女と逃避行と・・・

結局、快が家に帰ってきたのは六時過ぎになってしまった。学校から帰る途中も教室で出会ったコキと言つ少女のことで頭がいつぱいになり、宿題をしているときも全く身に入らず、夕飯の支度をしている時も幾度となく指を包丁で切りそうになつた。そして夕飯を食べ終わり食器を洗つた後、快は風呂に入つてゐる。

「ふう・・・」

体を洗い、湯船に浸かり、今日一日を思い返す。

「竹崎先生からもらつたウイングゼロの装甲、明久たちに見せたらどんな顔するかな・・・」

「明日からバイクで登校していいんだよな・・・」

「そりいえばAクラスがFクラスに宣戦布告するつてホントなんだろつか・・・」

といろんなことを考えていたが、

「コキ・・・」

やはり、コキのことがどうやつても頭から離れない快である。

「どうしてあんなに蝶つてしまつたんだ・・・あんな初対面の女の子に・・・」

そう考へてみると脳裏に自分がでもびつくりする位鮮明に彼女の別れ際に見せた笑顔が映つた。

「へへへっ！」

一瞬にして顔が赤くなり、ざばつ！と勢いよく立ち上がり湯船から出る。

「いかんいかん！何を考えているんだ、天野快！何をそんなに彼女を意識しているんだ！」

厳しく自分を戒め、風呂から出ようとしたその時、ツルツ、と足が滑り、

「どわあー！」

思いつきり尻餅をついてしまった。

そして翌日、快はバイク、ディケイダに乗って学園に向かつた。申請書も出したので、堂々とバイクに乗ることができた。

「お、快じゃねえか

信号が青に変わると待っていると、横から声をかけられた。

「ん？ おう、雄一か

声の主は雄一であった。快のバイクを珍しそうに観察している。

「お前バイクの免許持つてたんだな。中々良いバイクじゃないか」

「そうか？ そう言つてもらえるとありがたいな・・・そういうえば今

日は霧島と一緒にじゃないのか？」

今日は雄一の横に霧島がない。明久の話ではほぼ毎日一緒に登校しているらしいのだが。

「ああ、なんか今朝は秀吉の姉貴に用があるらしいでな」

雄一がそう答える。快はあの事を思い出し、雄一に知らせる。

「そうだ雄一、大変だ！ Aクラスが近々俺たちに宣戦布告するらしい！」

快がそう言つと、信号が青に変わった。そのタイミングは雄一が飲んでいた缶コーヒーを吹き出すのと同じタイミングだった。

「詳しいことは学校に着いたら話す！ また後でな！」

「ゲホッ！ ゲホッ！ エッホ！」

雄一がせき込みながら何か答えていたが、快はもう走り始めていた。

「・・・と言つわけだ」

と快が教室で雄一に竹崎先生から聞いたことを話す。ちなみにディケイダーは快の筆箱の中に入っているらしい。

「なるほどな、さすがはAクラス、言われなくとも自分たちから申し出ようつてことか

雄一は落ち着いてその話を聞いた。

「こっちからなら俺たちの好きなタイミングで宣戦布告できるが、こっちがまだ準備が整っていない間に、潰してしまおうつていう」とらしい

快はそう付け加える。

「・・・どうする雄一、今にもAクラスがやつてきそうだが」「いや、それはない。授業が開始されてからじゃないと宣戦布告はできない」

「そうか、ならまだ大丈夫だな・・・つてそういう問題じゃないだろ!」

「まあ、ガセネタかも知らねえし、じつちとしてはどうしようもないけどな。それに俺たちにはお前つていう秘密兵器がある」

「秘密兵器つて・・・」

快は満更でもない顔をする。

「それに、いつかは通る道だ。それが早いか遅いかだけの違いだ」雄一はもつAクラスとの戦争のことを本格的に考えているようだった。

そして朝のHRが始まった。

「えー、では朝のHRを始める・・・と言いたいところだが、また転校生がこのFクラスにやつてくれる」とになった。

「・・・・・・」

一瞬の沈黙、そして

『えおおおおおおおおおお!』

一部の『え』と大勢の『つおおおおおお!』が一緒にになり一気にFクラスの教室はヒートアップする。

「先生!その転校生は女子ですか!?」

福村が鉄人に質問する。

「ん?なんかデジャヴ・・・」

快はこの風景をどこかで見たことがあった。自分がここに転校してきたときである。今思うと随分、昔のこととに思えてくる。

「・・・女子だ」

鉄人が答えると、

『つおおおおおおおお!』

とさりにボルテージが上昇していくFクラス男子。

「じゃあ、入つてこい」

鉄人が教室に入るよう促している。どんな奴だろうか、と快も少なからず気になっていた。

スーッ、と障子が開く。

「ツー？」

ガタツ！と快はその転校生を見た瞬間、驚きのあまり筆箱を落としました。

「今日からここで皆さんと一緒に勉強させていただきます。天野ユキといいます」

ペコリ、と行儀よく礼をしているのは快が昨日会った、謎の少女であった。

『・・・・』

先程まであんなに騒いでいたFクラス男子が全員黙りこくれてしまつた。

「か、かわいい・・・」

「タイプだ・・・」

とぽつぽつと、小さな声があがる。

「そうだな、天野の席は・・・」

と鉄人が開いたスペースを探していると、ス、とユキが快の横を指差した。ババツ！と、そこに視線が集まる。

「先生、私、あそこがいいです」

「ん、まあ良いだろう。天野、お前少し右に寄れ」

快は言われるまま、ミカン箱を右にずらし、自身も右の方に寄つた。

「では、特に連絡事項もないのこれで終わる。今日は一時限目は自習だ。全員今日も勉学に励むよ！」
そう言って鉄人は教室を後にした。

「・・・・・」

快は何を話したらいいのか分からず、隣に座ったユキに全く話しかけられない。

「あ、あのセ・・・」

意を決して話しかけようと、ユキの方を向いた。すると、

「また、会えたね」

そう言って、ユキは快の頬に顔を近づけた。チュッ、と快は頬に何かやわらかいものが触れる感触がした。それがキスだと気付くには数秒かかった。

『ゆるさあああん！…』

ドスドスドスッ！…と突如カツターやら三角定規やらが飛来してきた。

「うわっ！？」

快はユキを守るように抱きかかえ、その飛来物たちを避けた。

「なにしやがる！？」

快が声を荒げるとFFクラスの男子全員（秀吉以外）が謎の覆面を被り、ロープを羽織っていた。

「これより我々FFF団が邪教徒、天野快に天誅をくだす。FFFの名のもとに！…」

リーダー格らしき誰か（声からして須川か）がそう叫ぶと他の連中も

『FFFの名のもとに！…』

と後ろに続いた。

「かかれえええ！」

須川らしき誰かがそう叫ぶと、鎌や釘バットなどどこに隠し持つていたのか分からぬ凶器を手に、一斉に襲い掛ってきた。

「クソッ！逃げるぞ！」

「えつ？あつ！」

快は困惑しているユキを抱きかかえ、教室から脱兎のじとく抜け出した。

「団長！ターゲットが転校生をお姫様抱っこしながら走っています！」

「逃がすな！奴を必ず血祭りにあげるんだ！…」

『おおつ！…』

とせりに追いかけてくる殺気が強くなる。

「ああ、もうつ、何でこうなるんだああああああーー！」

快の叫びが朝の学校に木霊し、快の逃走劇がスタートする。

俺と彼女と逃避行と・・・（後書き）

皆さん、こんばんはー、夜なら、んばんは
今回からキャラのセリフに読点を入れることをやめました。なかなか
まだ初心者つぱりが抜けませんが応援のほどよろしくお願いしま
す。

さて、次回は快の逃走の続きを書いていきます。お楽しみに！
感想お待ちしております！

俺と彼女と一喝と・・・、

「ビ」行きやがつた！」「

「探せー！近くにいるはずだ！」

「・・・・・」

FFF団のメンバー、と言つよりFクラスの男子に追われている快は、使われていない教室の隅に行き近くを通りかかった奴等をやり過ごしている。そして近くからいなくなつたことを確認して隣にいるもう一人の転校生、ユキに話しかける。

「全く・・・お前が俺にその、なんだ、キ、キスなんかするから朝から大変なことになつちまつた」

快がそう言つて、ユキに話しかけると、

「ふふ、ビックリした？」

と悪戯っぽく笑つて見せた。

「そりや驚くわ。大体、なんでお前苗字が俺と同じなんだよ？」
快は率直な疑問をぶつけた。

「だつて、昨日はあの後ホテルに泊まつたんだもの。苗字がなかつたらチエックインの時怪しまれるでしょ？」

と言つのがユキの答えだつた。正直あまり答えになつてないのでそれについて言おうと思つたが、快はもう一つ気になることがあつた。
「そう言えば、昨日、やらなきやならないことがあるとかなんとか言つてたけど何かできたのか？」

快がそう聞くと、ユキはバツが悪そうに答えた。

「うーん、それが結局分かつたのはここに転校することになつてることだけだったの。自分のことも名前以外は全然覚えていないの」
そつくりな状況にあるユキに快は親近感を抱いた。思わぬところで自分の仲間を見つけたのだ。快は意を決して聞いてみた。
「なあ、可笑しくても笑わないでくれ。お前は別の世界からやつてきたんじゃないのか？」

快がそうゴキに問うと、長い沈黙が訪れ、そして、

「ふつ、あはははははははー。」

とユキが盛大に笑つた。

「おい、おい！笑うなよ。言つたじやないか可笑しくても笑うなって」

「ふふつ、そうね、別の世界ね、なかなか面白い考え方だわ」

「…・…フ…」と微笑みながら答えた。

快はまたユキに見惚れてしまった。ユキは快の一拳手一投足が快を

ドキドキさせる。不意にコキが手を握ってきた。真っ白できれいな指が快の指に絡まる。

「不思議、快こむとなんだかひとつでも安心できる・・・」

「え？ ……」

「龍を殺してこの世が治まらぬ」と、さすがに口にした。

すればいいんだ！？）

「腹が立つ。音を立てて外に歸るがいい。」
さう思ふと、

快とユキの顔がゆっくりと近づき、もう少しでキスができるほど

距離が近づくにつれて、笑二郎とタニガシテの顔が聞こえました。

四七

「全員武器をとれ！奴に神の裁きを下すのだー！」

先程のユキの笑い声を聞き、FFF団が戻ってきた。聞こえる足音

「クソッ！ 感づかれたか。ユキ！」を出るぞ！」

「えつ？」

快はユキの手を引き、教室を出た。廊下に出ると、後ろにはおびただしい数のFFF団の姿があった。

「血祭りじゃあ……………」

「覚悟しろ幸せ者オー。」

怒号が飛び、**ドドドドドード**と武器を手に迫つてくるFF団から逃げるため、快はコキの手を引いて走る。すると

「逃がさんー。」

ヒュウ、と何かカッターらしきものが飛んできた。

「ややつー。」

小さな悲鳴が上がる。しかしそれは快のものではなかつた。快に当たりはしなかつたが、飛来したそれはコキの足に掠つたのだ。コキの足からは少量だが血が出ていた。

「・・・！」

どくん、どくん、と内側から抑えられない感情がこみあげてくるのを快は理解した。

「ユキ、ちよつと待つてろ・・・。」

静かにそつ指げると快は、ゆらりと自分からFF団の前に立ちはだかつた。

「・・・れだ・・・。」

「ん？」

快が小さくつぶやき、FFの1人が聞き返す。

「誰だ・・・。」

「え？」

「カッター投げたのは誰だつて聞いてんだよーー。」

そう叫び、ビリビリと空氣が振動する。ものす「」**殺氣**と怒氣を孕みながら、快が一步前に出る。ジリと一步後ずかるFF団は快が相当怒つていることに気付いた。さらにもう一步快が前に出ると、『す、すいませんでしたああああああーー。』

ものす「」**数の土下座**したFF団がそこにはいた。

「はー、これでもう大丈夫ですよ。」

コキの足に絆創膏を貼り、保健室の木島先生が救急箱を片付けなが

ら告げる。

「「ありがとうございました」」

快とユキの2人はお礼を言つてから保健室を出た。

「・・・・・」

2人の間に会話はない。保健室から大分離れるとやつと快は口を開いた。

「足、大丈夫か?」

「うん」

「そうか」

これだけの会話をするだけで快は頭の中でプチパニックを起こして いるのだった。

「ねえ」

「はい!?

唐突にユキに話しかけられ思わず声が裏返る。

「ふふつ、そんなに固まらないでよ。えっと、その・・・ありがとう・・・」

最後の方はモグモグと何を言つてゐるのか分からなかつた。

「え?」

もう一度聞き直そうとしてもう一度話しかけると、

「な、何でもない!うん、何でもないよ!」

ユキはパタパタと手を振つてそう言つた。

「?」

快が首を捻つてゐると

「ほ、ほらーもう1時限目終わっちゃうよー早く行かなきゃー!
タタタ、と小走りで走つていった。

「?、おかしな奴だな」

快も追いかけるよつと小走りで教室に戻るのだった。

俺と彼女と一緒に・・・（後書き）

皆さん、こんばんは。一晩なら、せんぜんは
今日は快がコキとの関係を進展させる回にしてみました。FFFを
一喝で黙らせる快の気迫と叫びはものすごいですね。（他人事かよ
！）

さて次回はAクラスに宣戦布告される回にしたいと思います。それ
では次回をお楽しみに！

俺と弁当と代表交代と・・・、

「はい、じゃあ今日はこれで終わりです」「4時限目が終わり、福原先生が教室から出て行きそのまま昼休みに突入する。

「あ～腹減った～」

快は言いながら鞄を漁り、弁当箱を取り出す。

「あ、今日はお弁当なんだね」

明久が快の方を向いて自分の弁当箱を取り出しながら言う。「まあな、食材も弁当箱もあつたことだし作ってみた。変じやないよな？」

快は弁当箱の蓋を開ける。中には白飯と卵焼きと野菜炒めと鶏の唐揚げが入っていた。

「全然変じやないよ。快も料理できるんだね」

そう言って明久が自分の弁当箱の蓋を開ける。

「・・・また、それなんだな・・・」

中には、前回と同じように乾麵がそのまま入っていた。

「大丈夫大丈夫、これでも結構美味しいんだよ」

バリボリと乾麵を食べる明久に、

「本当は？」

と聞くと

「・・・辛いです・・・」

と力なく答えた。すると、ぐきゅるるる～、と突然快でも明久でもない腹の音が聞こえた。音のした方に向くとそこには、

「・・・・・」

真っ赤な顔をしてうつむいているユキがいた。

「ユキ、お前昼飯は？」

快が聞くと、

「持ってきてない・・・」

が細い声でユキが答えた。

「じょうがないな、俺のやるよ。ほら」
すると、雄一が弁当箱を差し出してきた。

「えつ？」「」

快、明久、ユキの3人の声が重なる。

「どうしたんだよ雄一。全部あげるなんてえらく羽振りがいいな
快が雄一に聞くと、

「ああ、実はもう一個あるんだよ」

とまた鞄から弁当箱を取り出した。

「なんで2つも持つてくるんだよ・・・」

「片方はお袋が用意してくれたんだが、もう一個はびひやうら翔子が
入れたらしい。3時間の休み時間で鞄の中を見たら二つの間にか
入ってた」

「3時間の休み時間って、全然気が付かなかつたぞ」

「食べないと生命の危機に直面するから俺は翔子の方を食つ。お前
はお袋が作った方を食つてくれ」

そう言って弁当箱を開け、雄一は弁当を食べ始める。

「じゃ、じゃあいただきます」

ユキは雄一から受け取った弁当を食べよつと蓋を開けた。
「・・・・・」

なぜか、その弁当にはご飯がなかつた。2段重ねのタイプの弁当箱
の中味は、上がおかずで下もおかずといつともない状況になつ
ていた。

「あの、坂本君・・・」飯が見当たらないんだけど?」

「なつ! あのお袋はまた・・・」

「またつて前もあつたの! ?」

「ああ、そんときは上下共に白飯だつた。あの時はさすがに田を疑
つたぞ」

「お前のお袋さんある意味すげえよ・・・」

結局、ユキは快にご飯を分けてもらひ、そのまま談笑しながら昼

休みは続いた。

「は～食つた食つた」

雄一が食べ終わり、弁当箱を片付ける。すると、

「雄一、どうだつた・・・」

「うん？まあ、悪くはなかつたな。・・・うわっ！――」

そこにはAクラスの霧島がいた。

「お前、何しに来たんだよ？」

雄一が聞くと霧島は、

「宣戦布告・・・」

と答えた。ザワツ、と周りの空気が変わる。

「・・・どうこいつことだ？お前は代表じやないはずだ。なんでお前が宣戦布告に来る？」

「それは・・・」

雄一が聞き、霧島が何か言おうとして瞬間、ガラツと勢いよく障子が開いた。そこには、秀吉にそっくりの美少女が息を切らして立っていた。

「ハアツ、ハアツ、やつと追いついた・・・代表の足、速すぎるとわよ・・・」

「姉上！」

秀吉が声をあげる。

(秀吉が『姉上』って言つたことは、あいつがAクラス代表の木下優子か・・・)

快がそう考へてみると、

「おう、ちょうどお前と話がしたかったところだ。どうこいつとか教えてくれ」

雄一が木下に聞いた。

「どうもこうも、そこにいる霧島翔子さんが私たちAクラスの新代表になつたのよ」

「なに！？」

「驚いたわ。朝いきなり何の連絡もなしに來たと思えば、突然代表

を変わつてくれつてものすゞい剣幕で迫られちゃつて、何も言えず

にOKしちやつたわ

「翔子ちゃん、一体何のためにそんなことを？」

ユキが霧島に聞くと

「雄一に分からせるため……」

と短くそう答えるだけだつた。

「とにかく！代表が宣戦布告したのーアンタ達、覚悟しておきなさい！」

「戦争は1週間後……」

そう言つと、霧島と木下の2人は教室を出て行つた。

「……快の言つた通りになるとはな」

「ああ、だけど代表が変わるなんてことは想像できなかつたけどな

「どうする雄一、1週間後だつて」

「……相手はAクラス、油断できない……」

「おまけに向こうはかなり気合が入つてゐるよつじやつたぞ」

Aクラスの2人がいなくなり、Fクラスの教室ではザワザワと会話が始まつてゐる。5人は戦争に向けてどうするべきか考えていた。

「しかし、雄一は何を霧島と約束したんだ？」

快が聞くと、

「いや、これは誰にも言つなかつて釘を刺されてるから言えねえ」

雄一は答えなかつた。

「とにかく俺たちはAクラスの連中に宣戦布告されたんだ。ついに

来るここまで來た。明久、これは、

お前の望みもかかつてゐる。絶対負けられないぞ」

「うん、分かつてゐる」

「望み……？」

「ああ、そういうえば言つてなかつたな。こいつは……」

雄一が快に教えようとしたとき

「わーつ！言わないつて約束だろ！」

必死のそれを明久が阻止した。

「分かつ分かつた、快、こいつは姫路のためクラスの設備を良くしようと考えてる」

「あつさり言つたなこの野郎！！」

「ふーん、明久は姫路が好きなのか」

快の目がキラーンと光る。

「ああっ！言わないで、お願ひだから言わないで！」

「言わない言わない」

キーンコーンカーンコーン、と子鈴が鳴つた。

「さあ、俺たちは今度の戦争は必ず勝たなきやならねえ。快、お前、

装甲の方は？」

「ああ、大方大丈夫だ」

「よし、戦争まであと1週間だ。全員ちゃんと勉強して来いよ

「――「おう！」」」

5人はAクラスとの戦争に向け、闘志を燃やすのであつた。

俺と弁当と代表交代と・・・（後書き）

皆さん、こんばんは。一晩ならんばんは
えつと、まず言いたいのは翔子がAクラスの代表になつたことです
が、これはオリジナリティーを出すためであつて間違つたわけでは
ありません。

「あれ？ こいつ間違つてんじゃね？」と思つた方、その心配には及
びません！ これからも原作に沿つてオリジナルな作品に仕上げてい
きますので応援よろしくお願ひします！

次回はこの回の放課後、快に起こる出来事を書いてきますのでお楽
しみに！

俺とユキとブチートと・・・

Aクラスの宣戦布告を受けた日の放課後、快は帰り支度を整え立ち上がつた。ふと隣に座っていたユキが視界に入る。

「ん？ ユキ、お前は帰らないのか？」

見ると、ユキは帰る準備をしておりず、座布団にポツンと座つているだけであった。

「うん、ホテルを使おうとしてももうお金がないし、転校早々いきなり誰かの家に泊まるのも國々しげだらう」、かと言つて帰る家もないし、どうしよう？」

「どうしようって言わわれてもなあ・・・」

チラ、と会話を横で聞いていた雄一と明久に視線を向ける。しかし2人は

「ええ！？僕の家はダメだよ！まあダメじゃないけど食べるものがないし、その、あの、・・・」

「H口本があるからだろ」

「雄一！今僕が必死でどうオブラーートに包むつか考えてたのになんでストレーントに言っちゃうんだよ！・・・そついうわけだからごめんね天野さん」

「俺ん家も駄目だな。と声うか来ない方がいい。来ればまず俺のお袋が絶対何か謎の暗黒物質を台所で調理するし、その後俺は翔子の拷問を受けなきやならなくなる。お互いのためにもやめておいた方がいいぞ」

とノーの返事をするだけであつた。ならばと思い秀吉とマッシュリー二にも声をかけるが、

「すまぬ天野。そうしてやりたいのはやまやまなんじやが、姉上が厄介での。姉上が普通に下着だけで家を歩き回る姿を弟としては誰にも見られたくないんじや」

「そつなのか・・・・といふかさすがに来客時は服着るだろ」

「そういうのがないんじゃよ快。姉上は小学生の時、家に友達を呼んだ時の……」

「秀吉一、お姉ちゃん、秀吉にひきよむむむむむむむひと言話があ
るんだがじなー」

「あ、姉上！～ビウト～！」

「此にかぎり二年後一ヶ月」

「ああ！ 極まつとも！ 姉上

「曲がりなつ」

と秀吉はまだ「かへ連行され、ムツツリーにま、「なら、イシソリーニ、コニセキのいわひい、

「……女子を泊めるなんて俺の輸血パックが足りなくなってしま
う……」

となくやら不穏な発言をして断られてしまう。最後の手段で姫路と島田にも声をかけようとしたその時「俺はどこの昔から適任者がいると思ってたんだがな」「雄一が快にそう言った。

場所が変わつてここは文月学園の校門近くの駐輪場である。ここには自転車やバイクで来る文月学園の生徒が乗り物を授業中は置くことができるようになつてゐる。快以外にも、バイクを使つてゐる生徒は多いらしくスクーターが何台もあつた。

「で・・・」

「なんでこいつなるんだよー?」

そしてそう叫ぶ快の後ろにはユキが予備のヘルメットを被り座つて

いる。快の横には雄二と咲

「俺は最初からお前が泊めると思ってたんだがな」

「うんうん、僕もそう思ってた」「お前ら・・・！」

الطبعة الأولى

「どうか、なんでわざわざ俺たちに聞いて回ったんだ？お前も最初からそのつもりだつたんだろ？」

「うぐつ、そ、それは、お、お前らの誰かが泊めてくれたら泊めさせてやるうと思つてだな・・・」

「私も本当は快の家に泊まりたかつたから別にこのままで全然かまわないよ」

「ユキ、お前まで・・・」

「でも快、満更でもないつて顔してると

最後に明久にそう言われ、

「だーっ、もう！わかつたわかつたわかりました！俺がユキを俺ん家に泊める！これでいいだろ！」

快も決心がつきエンジンを吹かせる。

「じゃあ、快の家にレッツゴー！」

ユキが楽しそうに言つ。

「さて、じゃあ俺たちも帰るか」

「そうだね。じゃあね快」

「ああ、じゃあな」

そつ言つて快とユキ、明久と雄一に分かれて帰路につくのだった。

「じゃあユキ、俺は今日の飯の材料買わなきゃいけねえからスーパー寄るぞ」

「うんっ！」

快はユキをバイクの後ろに乗せてスーパーへ向かった。始終ユキは楽しそうだった。

「今日の夕飯何かリクエストあるか？あつたらそれにするけど」スーパーに着き、買い物籠を手にスーパーを回っていく。

「うーん、じゃあハンバーグ！」

ユキは声を弾ませながら答えた。

「あいよ」

快もユキと一緒に買い物をするのは楽しかった。ディケイドとして

怪人やらワームやらと戦つよりずっと樂しいと心から思えた。

「よし、一通り材料は買えたな。ユキ帰るぞー、ってあれ……？」

ハンバーグに必要な材料を買い終え、ユキに声をかけたがそこにユキはいなかつた。

「どこ行つたんだあいつ……？」

捜していると見つけた。ショーケースを食い入るよつに見つめるユキを見つけた。

「ユキ」

「きやあ！なんだ快か。びっくりさせなこでよもつー。」

「悪い悪い。買い物終わつたぜ」

「あ、うん、分かつた」

少し名残惜しそうにユキはもう一度ショーケースに視線を戻していく。そしておもむろに財布を取り出し中を見て、ガクーッとうなだれた。

「足りない……」

「なんだ、欲しいのか？」の雪の結晶みたいな形のストラップ

聞くと、

「うん……」

とうなずいた。

「780円か……いいぜ。これぐらこなら買つてやるよ」

「ホント!? ありがとう快! すつゞくうれしいよ！」

買ってユキにそれを渡すと満面の笑顔でユキは自分の携帯にそのストラップを付けた。

「はい、快も付けて付けて！」

2つ付いていたうちの1つを快に渡した。快も言われた通りストラップを携帯に付けた。

「えへへ、お揃いだね」

「お、おひ」

ユキにそう言われ、快は照れてしまつた。

「じゃ、じゃあ帰るか」

照れ隠してついでに快は歩を出した。

「うん！」

ユキはそう言って快の腕に自分の腕を絡ませた。

「デートみたいでしょ？」

「！」

ボツ！と顔が赤くなるのを自覚しながら快は悟られまいと平静を装いながらスーパーを後にすることだつた。
(このまま今田は何もなく過ごせるな)
快はまだこの時まではそう信じて疑わなかつた。

俺とコキペディア～～～（後編）

皆さんは「おひさま」や「夜なら」などは

今回は自分でどちらかと照れるぐら～いコキと快の交流を書きました。

読み返してみるとものすごく照れますね。

次回は「」の日の夜に快とコキの間に起る出来事を書きたかったと思つてこます。

お楽しみに～感想お待ちしております～

俺とユキとお泊り準備と・・・、

「着いたぞ。ここが俺ん家だ」

「おお～」

快とユキの2人は無事に快の家まで着いた。ユキは興味深そうに家を見渡している。快がティケイダーを小さくしてポケットに入れるところを見つけると、

「え・・・」

と驚いていた。

「ん？ こんなの当たり前だら、とりあえず上がってくれよ」

快が怪しまれないようそれが当然のように振る舞いながら玄関の鍵を開け、ユキに家に上がるよう促す。

「お邪魔します！」

軽やかな足取りでユキは家の中に入った。

「わあ～、ちゃんと掃除されてる～！」

「いや、驚くトロロそこかよ・・・」

そんなユキの反応を買い物袋をテーブルに置きながら眺めていると、ぐうぐうと腹の音が鳴った。それは快ではなくユキのものだった。

「あ、あははは・・・」

ユキが気まずそうに笑う。チラと時計を見ると時刻は5時37分を示していた。

「今から作るからちょっと待つてる」

快は一度2階へあがり、制服から私服に着替えて1階に戻りキッチンでエプロンをつけ、手を洗う。

「・・・・・」

何やらものすごく視線を感じる快。視線のする方へ向くと、ユキがソファ越しに準備をしている快を見つめている。

「テレビでも見て待つてくれよ」

と快は苦笑しながら玉ねぎのみじん切りを始めるのだった。

「コキ、できたぞ」

「待つてましたあ！」

快がコキを呼ぶとコキはピヨンとソファから飛び上がり、ものすごい速さでテーブルに向かつ。快が、向かいの席に着くのを待つてから、

「じゃあ、いただきまーす！」

とハンバーグを一口食べた。すると、ピタとコキの動きが一瞬止まる。

「どうした？不味かつたか？」

快が聞くと、

「ううん、とつても美味しそうにビックリしちゃった。すごく美味しいよこのハンバーグ！」

と笑顔で返してきた。

「そ、そうか。ならいいんだが」

と料理を褒められ快は照れた。そしてしばらく2人はおしゃべりしながら夕飯の時間を過ごした。

「美味しかった～。快、『うちわ』

「ん、おそまつさんでした」

夕食を食べ終わり快は力チャカチャと食事の後片付けを始めた。すると、

「あ、私も手伝うよ」

とユキも皿洗いを始めた。

「一宿一飯の恩はちゃんと返さないとね」と得意げに皿を洗っている。

「あ」

快はあることに気付いた。

「どうしたの？」

「お前の寝るとき用の服どうじょうが決めてなかつた

「あ」

ユキも気が付いたようだつた。

「大丈夫だよ、このまま寝るよ」

「いや、女の子を一人、学生服のまま夜寝させるなんて男がする」

「いや、そこまで考えなくともいいよ」

「皿洗いが終わつたら決めよ」

「・・・そうね」

このやり取りの最中も2人は手を休めなかつたので皿洗いはすぐには終わつた。

「じゃあ、2階に何かないか見てくる」

快は2階にあがつた。2階には快の部屋しかない、はずだつた。

「・・・・なんでだ」

なぜか空き部屋だつたはずの一室に寝具と机が置いてあつた。

「毎度毎度、ホント便利だ・・・がまさかここまでとは」

まさかと思いクローゼットを開けてみると、そこには女子用の服やらYシャツやらがきちんとたまっていた。そこにはパジャマもあつた。ちらと田を向けると視線の先には

「・・・・・」

女性用下着もきれいにたたまれて置いてあつた。それらを持って1階に降りると、ユキがテレビを見ながら待つていた。

「どうだつた?」

「あつた」

「へ?」

「ほら、これパジャマ。あとワイシャツもあつたからそれを明日着ればいい。あと・・・」

快は顔を逸らしながらユキに下着も渡す。

「・・・・快つて、1人暮らし大よね?」

「そんな目で見るな!誤解するな!」

「そうだよね、男の子が一人暮らししてればそういうのもあるよね

言つユキの田にはなぜか輝きはない。

「だから違うって言つてるだろ！」

必死に誤解を解こうと慌てふためいてると、

「ふつ、ふふ、あははははは！ そんなに慌てちやつて、可愛いん
だから！」

爆笑しながらペしペしと背中を叩いてきた。からかわれた、そう理
解した瞬間、快は赤面した。

「ほ、ほら！ 風呂も湧いてるから、さつさと入つてこい！」

照れ隠しひょと強めにそう言つと、くすくす笑いながら

「はーい」

と答えてユキは風呂場へ向かつた。

「全く・・・」

ユキに振り回された快は台所で水を一杯飲んで気分を落ち着かせた。

（まあ、悪い気はしなかつたな・・・）

そう思い、快はソファに座りテレビを見るのだった。

俺とユキのお泊り準備と・・・（後書き）

皆さん、こんばんは！ 一晩なら、なんばんは
今日は、ユキが快の家にやつてきて、一緒に飯を食べたり、おしゃべりしたり、皿を洗つたりして2人が親しくなつていく回にしてみました。ですがまだこの日の夜は終わりません。次回はユキに異変が起きます。快はユキを救うことができるのか！ 次回もお楽しみに！

俺と追跡と告白と・・・、

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ・・・」
快は今、真夜中にとある建物の中の階段を必死に駆け上がっている。
(クソツ、何がどうなってんだ・・・)

あまり状況が飲み込めないがひたすら階段を上り続ける。階段を上
りきると、扉が一つあつた。勢いよくそれを開くと、そこはこの建
物の屋上だつた。夜の空にはきれいな満月が光を放つてゐる。そし
て快は、満月を背にこちらを見ている人物に目を向け、名前を呼ぶ。

「・・・・・ユキ」

時間はさかのぼつてユキが快の家に泊まることになつた日の夜1
0時30分^{ごろ}になる。快とユキは、すっかり寝むくなり、一階に
上がつた。

「じゃあ、この部屋は誰も使つてないからここで寝てくれ。ちゃん
とベッドもある」

「ふあい」

ユキが欠伸交じりに返事をする。相当眠いようだつた。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなふあい・・・」

2人は互いの部屋に入つて就寝した。

快はベッドに入るとすぐに眠れた。しかしその眠りはすぐに妨げ
られた。何者かが快の体をゆすつたからだ。

「・・・・・ド」

「・・・・・イド」

「うーん、あと5時間・・・」

快はまだ寝ぼけた状態であつた。

「起きてください、ディケイド」

「げふっ」

腹部を少し小突かれ、快は目を開けるとそこには見知った顔があった。

「・・・！なんでお前がここにいるんだよ」

そこに立っていたのは紅渡だった。

「ディケイド、時間がありませんから単刀直入に言います。彼女、天野ユキには気を付けてください」

「・・・何？」

一瞬快は渡が何を言つてゐるのか分からなかつた。

「彼女は天野ユキというのとは別にもう一つ呼び名があります。『D B - Y』、それが彼女のもう一つの名前です」

「ちょっと待つてくれ。いきなり現れてユキに気を付けろつて言ってそのうえユキのもう一つの名前だと？一体何がどうなつてゐる？」
快は混乱していた。渡はさらに説明を加える。

「D Bとはディケイドブレイカーの略称で、Yはその番号です。2番目のあなたを倒すために作られた『ハイパー・ショッカー』の改造人間です」

「『ハイパー・ショッカー』？」

「ネオ死神博士が率いるスーパー・ショッカーの生まれ変わりです。すべての世界の悪を束ねています。彼女はもとはただの人間だったんですけどスーパー・ショッカーにさらわれ、改造手術と洗脳手術を施されてこの世界にあなたを追つて転送されてきたんです」
「転送だと？世界の亀裂を利用してここに飛ばされてきたつか？」

「その通りです。ですから・・・」

と渡が次の言葉を発しようとしたその時、ビュオオオオ！…ものすごい音がユキのいる部屋から聞こえた。

「！？」

急いで部屋にいき、ドアを開けると、窓が開け放たれそこから何かが飛び立つていった。

「ディケイド、話は後です！彼女はあなたをこの世界もろとも消滅

させようとしています。」

「なんだと…？」

「急いで彼女を追つて止めないといこの世界は消えてしまいます。」

「クツ・・・！」

快は急いで着替えて外に出てバイクに乗った。

「お前はどうするんだ？」「

快が渡に聞くと、

「僕も一緒に戦いたいのですが、この世界では何もできません。申し訳ありませんがあなたにすべてを託すしかありません」と申し訳なさそうに言った。

「んなこつたらうと思つたよ！」

快は悪態をつきバイクを発進させた。夜の道路は車が少なく、とても走りやすかつた。

（一体どこへ向かってるんだ？）

はるか前方にいるコキと思える何かは、夜の空を高速で飛んでいた。すると突然それは右へカーブし、さらにスピードを上げた。一体何があるのかと思い顔を右へ向けると、すぐにそれがどこへ向かっているのか分かつた。

「文月学園！？」

快の視線の先には快やその友人が通っている文月学園があつた。案の定それは文月学園の屋上に降り立つた。快も急いで校舎に入り、近くにあつた階段を駆け上がる。そして屋上にたどり着いた。夜空にはきれいな満月が光を放つていて、快は満月を背にこちらを見ている人と思しき何かに声をかける。

「・・・・・コキ」

快が声をかけるとコキは快に背を向けて話し始めた。

「快、あなたと初めて会つたのもこんな感じだったよね。でもあれは夕日だっだけ」

「・・・・」

快は黙つたまま聞いている。

「あのね・・・あの時私は自分のことは名前しかわからないって言つたけど、本当は自分のことは良く知つてたんだよ」

「ああ、お前が改造人間だつてのは聞いた。洗脳もされてて俺を倒しに来たんだつてのもな」

「そう・・・全部わかつてんのだ・・・でも、快がこの世界に来てくれたおかげで、私は洗脳が解けて私を取り戻せたの。ありがとうね。だから・・・」

バツと振り返り、腕を大きく横に広げる。

「だから私を止めて！自分ではどうすることもできない！私がこの世界を消す前にあなたが・・・！」

目を涙で潤ませながら、快に訴えかける。しかし快は、

「ふざけんなあ！！」

それを一蹴した。ビクッとユキが叫びに驚いて身を縮める。

「どうして！？私はあなたをこの世界」と消滅をせよつとしてるのよ！？」

「それがどうした！自分で言うのもあれだが俺は結構欲深でな、お前も助けて、世界も救つてやる！」

「だからどうして！？私は私に優しくしてくれたあなたを消そつとしてる。そんな私をなんで・・・」

「好きだからだよ！！」

快は叫んだ。気が付いた時には頭の中で思つていたことが口に出でいた。

「好きなんだよーお前も、この世界もーそれ以外に理由がいるか！？」

「・・・」

静寂が二人の間を包む。

「・・・ふ、ふふ、あははははは！」

ユキが笑い始めた。涙を流しながら笑い始めた。

「私が好きでこの世界も好きだからこの世界を救うか。快らしいわね。でも・・・」

ユキが笑顔を消す。

「もう……遅いの……」

ユキの体が変わっていく。灰色の装甲が足からユキの体を包んでいく。

「快……私のことが好きなら……私を……止め……で」

言い終わるとユキの体は灰色の装甲に包まれた。その姿はまさしく世界を消滅させんとする、悪魔の姿だった。

「……灰色のディケイドか。ハイパー・ショックカーも趣味が悪いな」快はベルトを腰に巻きながらそつそつと歩く。

『私を……止め……で』

ユキの言葉を胸に刻む。

「分かつて。今、助けてやるからな」

快は一枚のカードを取り出しバッグルに装填する。

「変身！」

『カーメンライド ディケイド!』

快の姿がディケイドに変わる。今、ディケイド対ディケイドの戦いが始まる。

俺と追跡とサバゲー・・・・・（後編）

皆さんこんにちはー夜ならじんばんは
今回は快対コキの始まりを書いてみました。読み返してみるとなん
だか最終決戦みたいなことになつてます。でもまだまだ書きたいこ
とが沢山あるのでこれからも頑張っていきまますので応援よろしくお
願いします！

次回は快対コキが爆熱ーじゃなかつた白熱しますーお楽しみにー

俺と崩壊と一回限りの最強と・・・、

「うおおおーー」

「・・・・・・」

ガキンーとライド、ブツカーソードモードがぶつかり合つ。しかしパワーの差が大きく、快は次第に押され始め、切られてしまつ。

「グ・・・ッ、これなら！」

《アタックライド ブラスト!》

快は後ろに跳び、ブラストで牽制しようとする。発射された光の弾丸はすべて命中したが、ユキはそれを気にすることなく快に接近し腹部に重いパンチを浴びせる。

「ガハッ・・・！」

パンチを食らい、吹っ飛ばされ手すりに体をぶつけたことにより、呼吸ができなくなる。

「・・・・・・」

ユキはあるで機械のように声もなくゅうくつと快に近づいてくる。「負けるかよ！」

快は一枚のカードをバッカルに装填する。

《カメンライド カブト！》

快はディケイドからカブトへとカメンライドする。そしてもう一枚カードを取り出し、装填する。

《アタックライド クロックアップ！》

快は人間には不可視の超高速移動『クロックアップ』でユキに攻撃を仕掛ける。高速で接近し、パンチとキックを浴びせ続ける。確実にダメージは与えられてるようだつたが、突然パンチが止められた。

「！？」

驚く快に、ユキは蹴りを入れた。クロックアップをしているはずならばこの動作は止まつて見えるはずである。だが、それを快は避けることができなかつた。

(まさか・・・!?)

快はもしゃと思い、ライドブッカーで切りかかる。しかしそれはひよいと避けられた。

「あつちもクロックアップ！？」

そう、向こうもクロックアップを発動し、快に追いついたのだ。
「どこまで強いんだよ！」

攻撃を仕掛けようとするユキが、ライドブッカーを手に切りかかる。『アタックライド プットオン！』

快は両腕にマスクドフォームのアーマーを装備させ、片方で受け止め、片方で攻撃した。2人の攻撃が、同時にお互いに入った。2人とも盛大に吹っ飛び、快はカブトへのカメンライドが解除された。

「・・・・・」

仰向けに倒れていたユキはムクと起き上った。すると、顔面の装甲の一部が砕けそこからはユキの右目が見えた。目は閉じていた。どうやらユキの自我はないらしく、灰色のディケイドの装甲の胸の部分にある、紫色のクリスタルのようなものが戦闘開始から点滅していたのでおそらくそれがユキの体を動かしているのだろう。

「どうする、このままじゃ勝てそうにないが・・・」

快はどうやってユキ、もとい、灰色のディケイドを倒すか考えた。しかし考えがまとまる前に、向こうが先に動いた。

「これより、ワールドクラッシュを発動します。これより、ワールドクラッシュを発動します。」

突然ユキの声でそう言った後、ユキは禍々しい黒いオーラに包まれ、空中に浮かんだ。そして十字架にかけられているようなポーズをとつた。すると、胸のクリスタルが光を強め、その光がユキの上に収束し、大きな球体になっていく。

「何だ！？」

快がその現象を見ていると、息を切らしながら渡が屋上に現れた。
「ディケイド、ついに世界の崩落が開始してしまいました！」

快は今まで見たことがない彼の焦りの表情を見て事態の深刻さを確

認する。

「ああ、見ればわかる。どうやって止める？」

快が聞くと、渡は

「一つだけ方法があります。これを使ってください」
渡は快に、スマートフォンのような端末を渡した。

「これは？」

「ケータッチと言つて、ディケイドの力をさらに向ふわせる道具です」

見ると、ケータッチの画面にはクウガからディケイドまでのライダーハーの紋章が浮かび上がっていた。快はそれをクウガから順番にキバまで押した。

『クウガ！アギト！リュウキ！ファイズ！ブレイド！ビビキ！カブト！デンドンオー！キバ！』

するとディケイドの紋章が点滅した。それを押すと

『ファイナルカメンライド ディケイド！』

ライドブツカーからクウガからのカードが飛び出し胸の部分に着き、額にディケイドのカードが着き、マゼンタのカラーから、シルバーを基調とした装甲に変わる。バックルが外れて腰の横に移動し、ケータッチをバックルがあつたところに装着する。

「・・・これがディケイドの真の力、コンプリートフォームです」「コンプリートフォーム・・・

オウム返しにそう言つて手を握り締める。これならやれる、そう思えるほど力が湧き上がってきた。

「その力で、世界の崩落を止めてください。あのクリスタルを碎くのです」

渡は快にそう言つた。

「ああ、だけどユキは大丈夫なのか？」

「それは私にもわかりませんが、あのクリスタルが彼女を操つているならそれを壊せば・・・」

次の言葉を言おうとするが、空の一部が突然割れ、その向こう側に

宇宙が見える。

「とにかくやるしかないってことか・・・！行くぜ！」

快はケータッチのクウガからキバまでの全ての紋章を押し『C』を押した。

『アルティメット シャイニング サバイブ ブラスター キング
アームド ハイパー ライナー エンペラー』

快の周囲に最強フォームのライダーたちが現れる。

「ディケイド、これを」

渡が一枚のカードを快に渡した。

快はそれをドライバーに装填する。

『ファイナルアタックライド オオオオールライダー！』

全てのライダーが自身の必殺技の構えを取る。

カブトハイパーフォームの『マキシマムハイパーサイクロン』が、
ファイズブラスターフォームの『フォトンバスター』と混ざり合い、
クリスタルに直撃する。

ブレイドキングフォームの『ロイヤルストレートフラッシュ』が、
アームド響鬼の『鬼神覚声』とライナーフォームの『電車切り』と
共にクリスタルにヒビを入れた。

そして、クウガアルティメットフォームとアギトシャイニングフォ
ーム、龍騎サバイブとキバエンペラーフォームのライダー・キックが
クリスタルのヒビをさらに大きくし、ユキの装甲にも亀裂が走る。

「うおおおおおお！」

そして快の渾身の『ディメンションキック』がクリスタルとユキの
装甲を完全に破壊した。

巨大な光の球体は消え、ユキがゆっくりと下降していく。それを受
け止め、抱きかかえた。世界の崩壊が止まつた。

「なんとか・・・止まつたな・・・」

快が変身を解くと、ケータッチが粉々に砕け散った。

「え！？」

驚く快を尻目に、渡は眉一つ動かさず「う」と言った。

「実は、このケータッチはもう限界を迎えていたんです。あと一回の使用で壊れてしまう程でした」

「そ、そうなのか・・・。良かった、俺が壊したんじゃないんだな」

快はほっと安堵する。

「ええ、それにあなたはこの世界を救った。最期に世界を守るために使われてこれも本望でしょう」

「なあ

「はい?」

「どうしてそれを持つててくれたんだ?」

快が聞くと、渡はこう答えた。

「私もあなたにこの世界を守れと言った手前、何かしないわけにはいきませんから」

「そつか・・・その、なんだ、ありがとな

快は照れくさそうに礼を言った。

「当然のことをやつたまでですよ。では私はこれで渡の前に灰色のオーロラが出現し、渡は立ち去りつつとして、足を止める。

「あ、あの時の愛の叫び、中々決まつてしましましたよ」

そう言つて、今度こそたちオーロラに向こうへ消えて行つた。

「・・・・・」

一瞬沈黙し、ユキの顔を見てから、快はボンッ!と顔を赤くした。ユキはぐらりと寝ついているらしく、すやすやと寝息をたてていた。

快はユキを背負い、夜の校舎を後にした。

俺と崩壊と一緒にやつの最強と・・・（後書き）

皆さん、こんばんはー、夜なら、こんばんはー、
何とコンプリートフォームが登場ですー、しかしーしー、一回やつの登場
でした短ッ！

今回はちょっと長めに書きました。いかがでしたでしょうか。
次回からはAクラスとの対決前を書いてきたいと思いますので次回
もお楽しみに！

俺と返事との人の秘密と・・・、

紅渡は真っ白な空間を歩いていた。ここは灰色のオーロラの向こう側である。彼は迷うことなく進んでいく。すると、彼の前に無数の本棚が現れた。

「やれやれ、あれほど取扱いには注意してくれと言つたのにやつぱり壊したね」

その本棚の向こうからため息交じりに1人の青年が現れた。

「あれは仕方がありません。ケータッチは限界を迎えていました」渡はそう静かに言い返した。渡の手には大きめの袋が一つ持たれている。

「では、新しいケータッチの製作をお願いします。設計図と材料はこちらで揃えました」

渡は青年にその袋を渡した。青年はそれを受け取りながら言った。
「いきなりこの『地球の本棚』にやってきて、ヒビだらけのあれを自分が次に来るまで保管しておいてほしいと言つてそのままどこかへ消えて、今度来てみればDB-Yとハイパーショックー、それとユキ、というキーワードで検索をしてくれだなんて、紅渡・・・君は一体何者だい？」

渡は快にケータッチを渡したときに息を切らしていたのは階段を上つて来たせいではなく、一度ここで検索の結果を聞いて、ケータッチを受け取り、すぐに走つて快のところに向かつたからである。オーロラを操作して、屋上に入る扉の前に移動していたのだ。

「誰でもありませんよ。ただ・・・もう一度と彼を、ディケイドを失いたくないと願うライダーの力を失つた哀れな1人の人間です」渡はフツと自嘲的な笑みを浮かべた。

「前に来た時と言つていることが同じだよ」と青年が返すと、

「お一一フィリップ、居るか？照井があの事件に関して検索してほ

しいんだよ」

と誰かの声が地球の本棚に響いた。

「あ、翔太郎が呼んでる。じゃあ僕は行くよ。一応この依頼は受け
ておくよ。ショッカーの技術・・・実に興味深いね。ゾクゾクする
よ」

フィリップと呼ばれた青年はそう言いつと羽織つていた上着のポケッ
トに袋を入れた。

「では、頼みましたよ。」

渡が踵を返し、地球の本棚から出ようとすると、

「そうだ、一つだけ聞かせて欲しい。新しいディケイドはどんな人
物だい？」

フィリップが渡に問いかけた。渡は背を向けたまま答えた。

「面白い人ですよ。自分を世界ごと消し去ろうとした女性に告白を
するような、そんな人です」

渡が言うと、

「フフ、興味深いね」

と言つてフィリップは地球の本棚から出て行つた。渡もすぐにそこ
を出ていき、また真っ白な空間を歩き始めた。彼の向かつている方
向には、ステンドグラスでできた扉があつた。

「ヘックシ！」

快はくしゃみをした。

「・・・誰か噂でもしてんのかな？」

そんなことを言いながら快はユキを背負つて夜道を歩いていた。バ
イクで帰ることもできるのだが、それでは眠つているユキが危ない
ので、ユキが目を覚ますまで徒歩で帰ることにした。

「・・・うにゅ・・・」

ユキが背中でもぞもぞと動く。起きたかと思ったがまたすぐにすう
すうと寝息が聞こえた。

「・・・・・・」

快はユキに言つた言葉を思い出していた。あんなことを会つて2日目に言うだなんてばかばかしいとは自分でも思えた。だが、快のあの言葉に嘘は無い。ユキには快が惹かれる何かがあつたのだ。快に分かつたのは、一目惚れは本當にある。ということだつた。

「雄一が言つた通り明久のバカが移つたかな」

快はフと笑つた。

「DB-Y・・・ねえ」

快はもう1つ気になることがあつた。ハイパー・ショッカーが快を倒すために改造した人間兵器の25番目がユキだと渡は言つたがならばそれ以前の、言つなれば『DB-A』とかはどうしたのかと。もしやそれ以前の者はすべて失敗作に終わつたのか、ならばそれらはどうなつた。そんなことを考えていると家の近くの公園まで着いた。ユキはまったく起きる気配がない。時計で時間を確認すると3時42分を指していた。家にはあと1時間もあれば着くだらう、そう思いユキを背負いながらまた歩き出す。

「・・・ふに・・・」

またユキが動いた。快はハイパー・ショッカーが許せなかつた。ユキのような望まれない改造を受けた人があと何人いるんだろうか、そう考へると快の心には沸々と怒りの炎が燃えた。

「またお前みたいなやつが来たら、どうすればいいんだらうな・・・

快はユキに話しかけてみる。返事はないと思つていたが

「・・・大丈夫・・・だよ」

と返事が返つてきた。歩みを止めユキを見ると、やはりすうすうと寝息をたてるだけだつた。

「そつか・・・そうだよな」

快はまた歩き出した。西の夜空に浮かぶ満月が2人をやさしく照らしていた。

「ううん・・・」

ユキは朝日を浴びて目を開ました。重い瞼を薄く開き、口がぞこなかに確認する。すぐに分かつた。快の家の自分が割り当たられた部屋のベッドであった。

「……」

ガバッと起き上がり、胸に手を当てる。無い、無くなっている。自分の中に重く沈殿していたあの感覚が無くなっていた。ユキはベッドから降りて1階のリビングへ向かった。

「ん、おはよう」

エプロン姿の快がテキパキと弁当を作っている。

「お・・・おはよう」

ユキも挨拶を返した。

「もうちよつと寝てもよかつたんだがな」

快がそう言しながら弁当を作る。

「・・・・・」

沈黙が続いた。

「あ、あの・・・えっと・・・その・・・」

ユキはもじもじと口籠つていると、

「昨日のことだけど、気にしなくていいぞ」

快が口を開いた。

「え？」

「世界も救えて、お前も救えた。これで良いじゃねえか。ミッションプリードだ」

快は弁当を包んでいる。ユキはキヨトンとなつてから

「そ、そっちじゃなくて・・・だから・・・」

と顔を赤くしながら言つと

「あー、あっちの方か。それは・・・アレだ、まだお前の返事を聞いてない」

快がテーブルの上に2つの弁当箱を置く。

「どう・・・なんだ？」

快がユキの皿をじつと見据える。

「私のことが、好き?」

ユキは快に確認するよつと聞いた。

「ああ」

快も答える。

「世界中の誰よりも?」

「当然」

「あなたを・・・」の世界」と洩れいとした私を?」

「全然気にしない」

「私のこと、護ってくれる?」

「もちろん」

それが涙をこらえていたユキの限界だった。

「うう・・・ひっく・・・えう・・・」

「おこおこ、泣くなよ・・・」

快は苦笑した。ユキは涙を拭いながら笑顔で答えた。

「不束者ですが、よろしくお願ひします」

俺と返事と2人の秘密と・・・、（後書き）

皆さんこんにちはー夜ならこんばんは
今回は新キャラとして仮面ライダーWからファイリップと声だけですが
が翔太郎を登場させました。いやあ、それにしても今回はちょっと
いい話な感じに仕上げてみましたがいかがでしたでしょうか？たま
にはこういうのも悪くないかな、なんて自分では思つてたり、思つ
てなかつたり。

次回からはAクラス戦に向けてのFクラスの準備が始まっています。
すのでお楽しみに！感想お待ちしています。

俺とユキおぐれと事後処理と・・・

ユキが快の告白を受け入れた朝、快はユキをバイクの後ろに乗せて文月学園に向かつていた。

「そう言えれば、来週の水曜日はAクラスとの対決だね」

赤信号で止まっていた時にユキが後ろから話しかけてきた。

「ああ、俺の新しい召喚獣の力を見せてやるぜ！」

快は自信に満ち溢れた声で答えた。

「へえ、それは楽しみね」

ふと横からそんな声が聞こえた。

「？」

見ると秀吉の姉、木下優子がいた。

「なんだ、お前か」

快が素つ気なく言つと、

「なんだとは何よ、なんだとは」

と腹立たしそうに言葉を返してきた。

「んで、なんか用か？」

「別に。これと言つた用は無いわ」

「なんだよ、何もないのかよ」

「ええ、私はバカとはあんまり話さないの」

「じゃあ、どうしたの？」

ユキが聞くと、

「ふふふ・・・今日は機嫌が良いのよ！」

と高らかに答えた。

「「はあ？」」

快とユキの声が重なる。

「なんてつたつて今日は私がネットで注文したB工・・・じゃなかつた。書籍が届くのよ！」

「うん、最後の方で微妙に言つちやつてるけどな」

快が指摘すると

「と、とにかく！今日はただの気まぐれで話しかけてやつただけなんだからー。」

と何やら「まかすように身振り手振りをしながら言つた。

「ほ、ほらー信号青よーさつさとどつか行きなさいー。」

鞄で叩いてきそうになつたので

「へいへい

快はアクセルを踏んだ。

「じゃあね、木下さん

ユキも手を振つた。

「あ、そうそう。そういう趣味、あんまり人に話すなよ。ドン引きされるぞ」

快は別れ際に言つた。

「・・・バカ　！」

叫び声がはるか後方から聞こえた。

しばらくして、快とユキは駐輪場に着き、ディケイダから降りた。すると、何やら、下駄箱の方でザワザワと話し声が聞こえたので下駄箱に向かうと掲示板に張り紙が貼られていた。

『文月タイムス号外　スクープ！！屋上に謎の焦げ跡！手すりは一部が大きく湾曲！一体何が！？』

と大きく書かれた学園新聞が掲示板に張られていた。その新聞には、写真で撮られた焦げて破損した床や大きく湾曲した手すりがアップで掲載されていた。

「・・・・・・・」

快とユキは凍りついた。そこに

「あ、快、天野さん、おはよー」

とのんきな声で明久がやってきた。

「オウ、アキヒサ。オハヨウ」

「ア、ヨシイクン。オハヨウ」

快とユキは明久の方を見ずに答えた。

「なんで片言？まあいいや、そんなことよりす」いねこれ。誰がどうやつたらこうなるんだろうね？」

明久が新聞を見ながら言った。

「・・・・・」

「あれ？ なんで2人とも無言なの？」

「ソンナコトナイヨー」

「また片言！？ しかもハモリ！？」

「ネエ、カイ。ワタシ、ソトノクウキガスイタイナ

「ソウカソウカ。ジャア、イコウ。イマスク」

「え！？ 2人ともどうしてそんな競歩みたいな速さで歩けるの！？ ていうか外の空氣つて普通に下駄箱から外に出ればいいんじゃ・・・」

明久の声はもう、2人には聞こえていなかつた。

「うわ、これは・・・」

「さすがにちょっと・・・」

快とユキは屋上の入口に立つて、屋上の状況を確認した。見ると深夜の戦いの激しさを物語ついていた。至る所に焦げ跡があり、ところどころヒビが入っている。

「やつぱり・・・」

「私たちの、だよね」

その凄惨極まる光景は以前の屋上の見る影もないほどだった。

「どうする？」

「どうするって言つたつて・・・」

2人は顔を見合わせ、同時に溜息交じりに言つた。

「・・・いやむやにしと」「う」

快とユキは、階段を下つた。

俺といづれと事後処理と・・・（後書き）

皆さんにちばー夜ならんばんは
今回は冒頭に木下優子さんを登場させてみました。快とユキの戦い
の後に起きた出来事を書きました。みんないかがでしたでしょうか?
次回もお楽しみに！

俺と脅迫と予定変更と・・・、

教室に着き、障子を開けるとドドドドドーとFクラスの男子たちがユキに迫ってきた。

『天野さん！今日は是非俺の家に！』

口をそろえてユキに自分の家に泊まつてくれるよう頼むバカ一同。それにユキは

「え、と、実は、私、快の家に住まわせてもうることになったの！」と爆弾発言。ギロリ！と快にバカ達の殺氣を孕んだ視線が突き刺さる。

「おう、てめえ天野てめえどういうことだコラア！？」

「なんでお前ん家に天野さんが住むんだよコラア！？」

「あれか？苗字一緒に親近感が湧いたんかコラア！？」

と文句を垂れてくる野郎が大量にいる。そこにユキが楽しそうな笑みを浮かべながら

「そういうえば、パジャマに着替えさせてくれたっけなあ～」

もはやクラスター爆弾発言である。ちなみにこれは真っ赤な嘘である。しかし彼らは

『・・・・・・・・コロス』

思いつきり信じている。ギロリ！と窓ガラスの一枚に亀裂が走る。快はこれをただの老朽化と思いたかった。大量の殺気に耐え切れず割れたなんて考えたくもない。

「おいユキ！変なこと言つくなよ！」

快は殺気に圧倒されつつ、ユキに言つた。するとユキは

「ふふ、深夜に熱い愛の告白をしてくれたのは誰だつたかな～？」

核爆弾発言投下。

『天誅ウウウウウウウ！――！』

ものすごい数のFクラス男子が快に襲い掛かった。中には明久や雄二、ムツツリーの顔も見えた。

「ちよつ、お前ら、落ち着け！あれば嘘だ！なあユキ…」

快はユキに話を振った。

「本当か天野さん…？」

「どうなんだ…？」

ユキに質問がとぶ。この隙に逃亡を図ろうとした快。

「んーと、パジャマに着替えさせてもらつたっていつのが嘘」「なーんだ。そうなのかー、って住むのと告白は本当じゃねえかああああ！！」

快、一瞬で捕まり、逃亡失敗。

「これより異端審問会を開始する。須川異端審問会会長、いかが致しましよう？」

5人掛けで抑え込まれ、全く身動きが取れない快の処分が決められていく。

「やめろー！離せー！」

ジタバタともがくが、逃げられない。そして処分が決まった。「よし、被告天野快を手の爪を全て深爪にする刑に処する」

「いやだあああ！」

「さあ！観念しろ！」

快の手に福村の爪切りが近づく。爪切りが爪を挟みそうになつたその時、ガシッとユキが福村の手を掴んだ。

「へ？」

戸惑う福村にユキはニコッと笑い、そして思いつきり腕を捻つた。

「いででででででで…！…？」

「ホントにやることは無いんじやないかな？」

ユキはニコニコと笑いながらギギギギ…と福村の腕を捻り続ける。

「いだだだだだ…！ギブ！ギブ！」

福村が肩をタップし、ユキの締め上げから解放される。

「みんなもそう思うでしょ？」

ユキが他のFクラス男子達に問いかける。

『はい！全くもってその通りです！』

全員が口をそろえて言った。

「全員席に着け。HRを始める」

西村先生が教室に入ってきた。皆そろぞろと自分の座布団に戻る。

「全員、知つての通りAクラスとの戦争は来週に予定している・・・」

「

西村先生が今度のAクラスとの戦争について話を始めた。

「・・・はずだが」

『はずだが？』

全員が西村先生の言葉に首を傾げた。

「その戦争がこちら側の理由で今週の金曜日になつた」

「え？」

快の一言の後、

『えええええええ！？』

と驚きの声の大合唱が教室に響いた。

「ちょっと待て鉄人！そりや一体どういうことだ！」

雄一が立ち上がり、抗議の声をあげる。

「そうですよ鉄人！金曜日つてあと3日しか無いじゃないですか！」

明久もそれに続く。しかし、当の西村先生は

「西村先生と呼べ。この件に関しては私もよく聞かされていないから私に抗議されても意味がないぞ」と抗議に全く聞く耳を持たない。

「じゃあ鉄人、せめて理由だけでも教えてください！」

快も立ち上がった。勢いで『鉄人』と呼んでしまった。

「西村先生と呼べと言つている。理由は実のところ私も聞かされていない。学園長から伝えろと言わされて伝えただけだ」取りつく島もない。

「では朝のHRを終わる」

そのまま鉄人は教室を出て行った。

「明久」

雄二が明久を呼ぶ。

「分かつてるよ、雄二」

明久が答える。そして二人は障子に手をかけた。

「俺も行こう」

快もそれに付いていった。スタッタ、最初はゆっくり歩いていたが段々と速くなり、目的の場所に着くと猛然とまるで勢いをつけるよう走った。

「――ババアアアアアアアアアアア――」

バンッ！とドアを蹴って開ける。

「来ると思つていたよ」

そこには大きな椅子に座った学園長、藤堂カヲルが座っていた。

「言いたいことは分かつてるよな？」

雄二が学園長に言った。

「戦争の日程の変更の事だろ？？」

学園長は静かに答えた。

「ああ、なんでこうなった？訳を聞かせてもらおうか」

快が学園長に詰め寄つた。

「私たちも聞かせてもらいたいですね」

後ろから声がして振り向くとそこには霧島と木下が扉の前に立っていた。

「おやおや、まさか△クラスの代表と△代表が来るなんてね」

学園長が笑いながら言った。

「学園長、どうしてわざわざ予定を早めたんですか？教えてください」

木下も学園長に詰め寄つた。

「ふん、まあお前達になら教えて構わないだろ？」「

学園長は椅子から立ち上がり、窓に顔を向け、快達に背を向けた。

「今朝方、こんなものがここに置いてあってね」

カサ、と学園長はデスクの上に一枚の紙と2枚の写真を放り投げて

置いた。

「これは……？」

木下が写真を手に取り、顔をしかめた。そこにはボロボロの屋上が映っていた。

「……じつちは？」

明久の手には紙があった。そこには殴り書きで

『学園全体をこうされたくなれば、今度行われる2年Aクラスと2年Fクラスの召喚獣戦争を今週の金曜日に行え。なお、この手紙を警察などに通報した場合即刻学園を破壊する』

と書かれていた。

「脅迫文じゃないか……」

「これを送りつけた奴の目的がなんであれ、こちらとしてはこれに従うしかないんだよ」

学園長は苦虫をかみつぶしたように嫌そうな顔をして言った。

「お前たちの作戦か？」

雄一が霧島に聞いた。

「……こんな汚いやり方するはずがない」「だよな」

「全く、癪に障るつたらありやしないよ。じつはこのことはあまり公にしたくないんでね」

「このことを知っているのは何人いるんだ?」「快が聞くと

「お前達を含めて私と高橋先生の7人だよ」と答えた。

「で、お前たちの方に問題が無ければ金曜日に実施したいんだがね」

学園長が言った。

「良いじゃないか。こういふのは中々できない体験だよ」

学園長は薄く笑いながら言った。

うーん、と悩んでいたら

「いいですよ。Aクラスは学年のトップです。この程度のことじでうろたえてたらAの名が泣きます」

木下がきつぱりと言った。

「第一、こんな手を使わなくともこの人たちには勝てますから」と挑発するようなことも言った。きつぱりと。

「いいぜ、そっちがその気ならこっちもこの脅迫文の要求を飲むぜ。俺たちは勝たなきやならねえ」

雄二も負けず劣らずの威勢で言った。すると学園長の笑みはより一層濃くなつた

「いいね、気に入ったよお前たち。じゃあお前たちの戦争は今週の金曜日だ。このことはくれぐれも内密に頼むよ」

『はい！』

5人の返事が学園長室に響いた。

「・・・・・」

しかしそまだ誰も気づいていなかつた学園長室に近い廊下でこの一連の会話を聞いていた人物がいることに。彼はニヤと口元を歪めるのだった。

俺と脅迫と予定変更と・・・（後書き）

皆さん、こんばんは！ 夜なら、こんばんは
前回は全くあどがきに何書いていいのかわからずものすゞい駄文な
感じがしてしまいました。本当にごめんなさい。

今回は学園長に脅迫文が届いて戦争の日程が変更になるといつ展開
を書きました。なんだか快達と学園長の会話を盗み聞きしている人
物も出てきて、ますます複雑になってしまいますね。
次回は戦争に入れたらいいなーっと思っています。次回もお楽しみに
！

俺と盜難と決戦前と・・・

Aクラスとの戦争の予定が変わり、今週の金曜日に変更された日から3日後、今日がその戦争の日である。快はユキをバイクの後ろに乗せて学園に向かった。

「いよいよ今日だね」

ユキが快に話しかけた。

「ああ、絶対勝たなきやな」

快はそう答えた。

「応援してるよ」

「おう、任せとけ！」

快はグッ、と拳を握る。

「あわわ、快！片手運転は危ないよー。」

「おつとつと」

ユキに言われ、すぐにハンドルを握る。

「それにしても、脅迫してきた人の目的はなんなんだ？」

ユキが言った。

「さあな、それはさすがに俺でもわからん。一体何を企んでるのやら」

実は昨日新たな脅迫文が届き、戦争はラウンド制の一対一の戦いが5回で先に3勝したチームの勝ちというものになった。

そんな会話をしていると学校に着いた。教室に入るともつぱり集まっていた。

「おう、快、来たか」「

「雄一、今日は頼むぜ」

「ああ、任せとけ」

「・・・おはよー」

「お、ムツツリーーか。そりゃあれば今日の勝負の科田は保健体育があつたな」

「・・・必勝」

「はは、自信満々だな」

「天野君、おはようござります」

「姫路、今日は頑張りうぜ」

「はい。天野君も頑張つてくださいね」

「・・・えーと」

「一人足りない」とに気付いた。

「島田は？」

快が聞くと雄二が答えた。

「風邪だそうだ」

「そうか、風邪か・・・ってなんだと!?」

快は驚いて、声が微妙に裏返った。今回の戦争の参加者は、快、雄二、ムツツリー、姫路、島田の5人のはずだつた。

「仕方ないだろ、激しい頭痛と高熱だそうだ。そんな状態で戦えつて方が無理に決まってる」

「じゃあ、代わりはどうするんだよ?」

「それを今、全員で考えていたところだ」

すると今度は校内放送がかかつた。

『2年Fクラスの天野快君。2年Fクラスの天野快君。大至急技術室まで来てください』

「なんだよこんな時に!」

快は悪態をつきながら技術室に向かつた。

技術室に着き、扉を開けると、竹崎先生が待つっていた。

「失礼します」

快が入ると、ものすごい速さで竹崎先生が快の肩を掴んで揺らした。

「大変だ! 盗まれた!」

ゆさゆさゆさゆさ! !と快をゆすりながら焦つているような口調で言った。

「なん、です、か、なに、が、ぬす、まれ、たん、です、か!」

最後の『か！』で搖さぶりを止めさせて快は聞き返した。

「装甲だよ！新しく製造した装甲が盗まれたんだよ！」

「え！？装甲つてウイングゼロだけじゃなかつたんですか！？」

快が聞くと

「ああ、実はウイングゼロ以外にもう一つ作ろうとしていて、あの時は作りかけだったから見せなかつたけど、昨日完成したんだ！それが今朝ここに来たら盗まれたんだよ…」

と言つた。

「なぜそつ言いられるんですか？」

快が襟を正しながら言つた。

「昨日の夜中に完成して微調整は次の日の朝やうつと思つてそのままにして帰つて、今日来たらなくなつていたんだ。こんな張り紙もあつたよ」

「張り紙？」

快は差し出された一枚の紙を見た。そこに学園長に書いたものと同様に殴り書きで

『この装甲は頂く。私の計画に必要でね』

と書いてあつた。

「で、何の装甲が盗まれたんですか？」

聞くと竹崎先生は

「エピオンだよ！！エピオンの装甲が盗まれたんだよ！」

と慌てていた声をさらに慌てさせて答えた。

「エピオン！？エピオンつて、あのエピオンですか？」

快もエピオンの名前に驚く。

「そう。ウイングゼロと死闘を繰り広げたあのON製ガンダム、『
ガンダムエピオン』のデータと設定をもとに開発した召喚獣追加装
甲計画第2号エピオンだよ」

「それが盗まれた・・・？」

「そつだと言つてるじゃないか」

「でもあれ？装甲つて俺しか動かせないんじゃ？」

快が当然の疑問を先生に言ひ。

「学園長にこの前の稼働テストのデータを見せたら『ここにだけこんなすごい能力を付けたらパワー・バランスが崩れちゃうだらう。それに万が一のときこいつを止めるための装甲がいるだらう』って言つから、事前に作りかけの装甲・・・エピオンでその点を補いたいって言つたら、『それもあいつにだけ動かせるんじゃ意味がない。誰でも動かせるよう調整しておくれ』って言われたからその点を改良したんだ」

快はババアは本当に余計なことをする天才なんじゃないかと思つた。
「で、エピオンの性能はどれくらいなんですか?」
「ウイングゼロと同等か、いや、使う人が使えればそれ以上だね」
「そんなものを盗む奴に心当たりは?」
聞くと、うーんと唸つてから
「いや、さっぱり見当がつかないね」
「でも」
「?」

「エピオンはまだ微調整が必要で動かすことはできるけどまだロントロールできるほどじゃないんだ」
「うなんですか」
「だから無理に使おうとすれば召喚獣が暴走してしまつかもしれない。そんなものを犯人は何に使おうと言つんだ?」
竹崎先生は首を捻つた。

「とりあえず、俺はこの後△クラスとの対決がありますからもう行きますけど、どうします? 来ますか?」
快がそう言つと
「ああ、それは行くよ。」の田で戦うゼロの姿を見たいしね
「じゃあ、エピオン捜索は後でつてことで、失礼します」
快は技術室を後にした。

「とこいつことだ」

快は明久たちに技術室で何があったのかを話した。

「なるほど、おそらく犯人はババアに脅迫文を送った奴と同一人物だろうな」

雄一は落ち着いた口調で言った。

「ああ、俺もそう思つてる。文字も書き方が乱暴だったからな」

快も雄一の意見に同意した。

「そういえばそつちはどうなったんだ?」

快が聞くと

「ふつふつふ・・・ついに僕の時代が来た!」

と勢いよく明久が立ち上がつた。

「雄一・・・もしかして・・・」

「そのまさかだ。島田の代理は明久にやつてもらひ」

雄一は腕を組みながら言つた。

「大丈夫なのか?こいつ・・・バカだぞ」

快は言い放つた

「刺さつた!僕の心に何かがド直球で刺さつた!」

「大丈夫だ。こいつはバカなおかげで召喚獣を使つた雑務を多くこなしている。そこいらの奴よりは、召喚獣のコントロールは優れるだろう」

そう言つてから雄一はうんうん、と頷いている明久を見て一言付け加えた。

「バカだがな」

「なんなの!?ホントは嫌なの!?!?」

抗議する明久の目は涙目だつた。

「さて、お前ら聞いてくれ。俺たちはAクラスから勝利を勝ち取つて、最高の設備を手に入れようとしている。全員、勝つことだけを考えろ! Aクラスだつて何だつて俺たちには敵わぬいってどこを見せつけてやろうぜ!」

雄一が士気を高揚させるために言つた言葉は中々うまいものだつた。

『おー!..』

皆のやる気満々の雄たけびをあげた。

「よし！ 参加する奴は今からテストを受けに行くぞ！」

雄一を先頭に快達参加者はテストを受けに行くのだった。

俺と盗難と決戦前と・・・、（後書き）

皆さん、こんばんは。一晩ならんばんは
気が付けばもう30話目です。いやあ、頑張ってるなあ自分。そん
なことより今回は新しい装甲が登場です。ウイング関連でエピオン
の装甲です。初めはゼロがエンドレスワルツ版だったのでナタクに
しようと思ったのですが、やっぱりゼロのライバルはエピオンしか
いないと思い、エピオンを選びました。

さて次回はAクラスとの対決が始まります。エピオンはどうに消え
たのか？
次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4244x/>

バカとテストと召喚獣と・・・、

2011年11月21日14時29分発行